

死神の刃

迷い鶴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつの間にか生まれ変わっていた主人公、護廷 斬魄は未来に死んでいく鬼殺隊の剣士を殺させないという偽善の元に鬼殺隊の剣士として戦うことを決意する。主人公は己の望む未来を手に入れることが出来るのか。

鬼滅の刃とBLEACHのクロスオーバーです。作者の平子愛が爆発した結果連鎖爆発した作品となります。作者の趣味嗜好が極限まで盛り込まれています。必ずネタに走ります。

目次

主人公設定	1
始まりの道	5
生涯の友	8
弟子	12
少しの覚悟と少しの教育	15
下弦	18
温もり	22
二人の覚悟	26
アドバンス召喚	31
拙い覚悟	35
背負う名	39
殲滅戦	42
逆撫	46
二枚屋 Oh-Ethu!	50
護廷十三隊	53
富岡義勇という男	57
上弦の影	61
剣八	64
柱会議 (ミニ)	68
VS 童磨 1	72
VS 童磨 2	76
VS 童磨 3	83

主人公設定

若干のネタバレを含みます

護廷 斬魄（ごてい ざんぱく）

呼吸 雨の呼吸（水と雷の複合 メインは雷）

所謂転生特典

認められた死神の斬魄刀を使うことができる。また死神関連に関する物事に対する一定以上の才能。またこの特典については主人公は知らないものとする。

両親は不明で主人公の一番古い記憶の時には既に貧民街で物乞いをしていたが主人公の記憶が戻ってからはその知識を活かして賭け事や知識を披露して目立たないように少しだけ儲けていた。

F a t e風ステータス

筋力 B
耐久 D
敏捷 A +
霊力 E X
幸運 B |
呼吸 B

鬼殺隊の剣士の平均がCだとした場合の相対表

柱は基本的には2つ以上E Xであり必ずと言っていい程呼吸の値がE X

顔は中の上で髪は金髪に極限まで近い茶髪で光の当たり方によっては金髪に見える、糸目ではないが目が細い。

個人戦闘能力は高く、主に頭を使った戦い方をする。なお、頭を使う(物理)ではない。さらに斬魄刀を使ったオールレンジ戦闘も可能である。斬魄刀を使わなくても普通に強い。

使える技能としては始解に無窮瞬間、瞬歩、鬼道など死神としての一般的技能から特一定人物のみが使える特殊技能でも使うことが可能である。また、裏技を使うことによつてとある技能も実現可能である。

卍解に関して

卍解をするには死神に認められるだけでなく斬魄刀にも認められなければいけなく、尚且つ最大三分でしかも能力は若干劣化している。また時間制限をオーバーして使った場合伸びた秒数×一時間の間斬魄刀及び鬼道などの死神に関する技能の一切を使用不可とする。また、時間以内に使つたとしても使用後初期のヒノカミ神楽と水の呼吸を使用した炭治郎のような状態になる。

主人公の前世

大学三年生の時に寝ている間に心筋梗塞による死亡。なので本人は死んだ事に気付いていない。別に神様のミスだとかそういうのは無く、そっち側方面に言うのであれば死ぬべきタイミングに死んだ。重度ではないが軽度とも言えないオタク。中途半端な存在。高校でBLEACHを読みオサレに目覚めたので一般人とは一線を駕

す服装。よく言えばスタイリッシュ悪く言えば厨二病。しかしそれが何故か似合っていた為にまあまあモテていたが本人は授業が終わり次第家に帰り娯楽三昧、サークルは活動頻度も少なく超ゆるゆる系フットサルサークルに入っていた。転生した理由は神の気まぐれ。寝ている間に頭を覗いて主人公に似合う特典を勝手に授けた。そして授けると共に死に、転生。

主人公の性格

真面目な方ではあるがネタに走らずには居られない。最早オタクの性分である。故に周りからしたらただの変人。しかし頭は悪くなく咄嗟の機転も効くためそのネタに走る性格さえ除けば優秀である。頭の良さ

偏差値は60ぐらい、咄嗟のアドリブが死ぬ程美味い。しかし偶に矛盾する。

ヒロイン候補

オリヒロインか胡蝶カナエさんで迷ってます。オリヒロインの都合別時空（別のアニメや漫画、小説）から持ってきます（それはオリヒロインとは言わないのでは？）

以下別時空ネタ

以降はとてつもなく雑なので飛ばして貰って構わないです。

ヒロアカの場合

「SMEEEE」

「轟け！『天譴』」

雄英高校入試!!緑谷出久!!主人公に見せ場を取られた為雄英高校入学出来ず!!!別の高校で緑谷出久くんはヒーローになりました。

ありふれた職業で世界最強の場合

「メルド団長……この職業の死神って……なんですか？」

「し、死神だと……？すまん聞いたことがない職業だ……」

転生したらスライムだった件の場合

「種族……死神？え？え？」

Fate

「君の身体は面白いね」

魔術師達の実験台!!!

Fate／Grand Orderの場合

「天秤の守り手よ!!」

「サーバント、セイバー。真名は平子真子やよろしゅう頼むなクソガキ」

斬魄刀を触媒に死神を召喚できるので戦力に問題無し、ゲーティア
涙目

とある魔術の禁書目録

「君はこの計画には不要だ」

「あつ……」

アレイスターによる計画の支障が出る可能性があるため殺害される

以上！

次の話から本編に入ります

始まりの道

やあ！はじめまして！Nice to meet you. 俺の名前は護廷 斬魄！ピッチピチの11歳!!ヒロアカならば死神に慣れそうな名前をしているが残念。今の時代は嘉永！え？嘉永知らない？明治あるじゃん？あれの幾つか前だよ。まあこのストーリーの本編は大正だぜ！大正だったらジャンプで見た事があるぞ？って人。その記憶は間違いじゃない何故かって？

「こつち来んな!!手鬼があああああ!!!」

絶賛藤襲山で鬼殺隊最終選抜真っ只中!しかも手鬼に狙われてるぜ!ワイ、まだ死にたくないんやけど。

こんなことになった経緯なんだけどさあ!聞く?いらぬ?あら、ほんと?聞かない?ホントに?ちよつとも?すこしだけでも聞かない?俺の苦勞聞けよ?な?俺も最初は死神かと思っただよ。尸魂界の流魂街かなあつて思つてて周りみんな和服だったし、俺も最初は死神に転生だよったああああ!なんて思つてたら鬼が出るぞつて言われるし、え?虚じゃねえの?つて思つたさ、結果鬼滅の刃の世界!しかも大正なんてまだ先!え?炭治郎と同じ歳じゃねえの?つてあせええええええ

「惜しいなあ!狐面!!あと少しで楽になれたのになあ……」

手鬼はそう言う漫画よりも気持ち悪い笑みで走り抜けてくる。やはりこのテリトリーで行き続けていただけあり地形を活かした動きで追い迫ってくる。

だがしかし、俺の呼吸もこの地形だからこそ活かされる。

「雨の呼吸 壺の型」

雨の呼吸って言うのは雷の呼吸と水の呼吸を複合させた俺独自の呼吸さ!雨の呼吸の売りは森の中などの足場の悪いところでの機動力さ!まあだから未だに逃げきれているんですけどね!!

「落雫!!」

単純な上からの振り下ろし。腕の一本を奪うも未だ健在てか手鬼って前世で呼ばれてたぐらいですし腕一本じゃ意味ねえっての!!

「おい、鱗滝の弟子い……現在は慶応何年だ」

「明治ですう！慶応とかもう終わってますう！！年号もわからないんですかあ!？」

「ああああ!!!」

うつわ、マジで叫ぶのかよ、純粋にキメエんだが

「年号があ!!年号が変わってるう!!」

今がチャンス……!必殺、漫画直伝……煽りの呼吸……!!

「年号もわからないとか老害ですねえ!どんまああ!!」

そして間髪入れず取り敢えず遁走。ジョースター家だつて最終奥義は逃げる。だから俺も今は逃げる。勝ち目?一応あるがとてつもなく目立つ。藤襲山に来る前、鱗滝マウンテンで修行したからわかる。まだ錆兎は鱗滝マウンテンに来てねえ!!てかそれどころだからこそ俺はここで!!!原作を変える!でも詠唱時間だけはおくれ。この技が鬼に効いたのは確認済み、一発油断している隙に……その首に叩き込む!!

「落ち着け、いける!ひたすらだ……この技なら確実に殺せるからこそこの技をひたすらに鍛練して来たんだ!!腹アくくれ!!」

呼吸を整え相手の後方に躍り出る。

「そこかあ!!!」

さあ、研ぎ澄ませ

俺は……護廷の名を背負う男だ!!

「君臨者よ!!」

「血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ」

腕を避け、木を踏み場に宙に飛び出す。

さあ、逃げ場はなくなつた。

「蒼火の壁に双蓮を刻む 大火の淵を遠天にて待つ」

詠唱は終わり、腕を伸ばし両手を開く。

相手の頭上をとつた。もう、俺の勝ちだ

「破道の七十三・『双蓮蒼火墜』!!」

最初はたまたまだった、護廷 斬魄なんて名前だからふざけて始解なんてやったものだ。しかし始解は出来ず落ち込みならば鬼道だ、蒼

火墜だ！と思い詠唱をすればなんということだろうか……出来てしまったのだ。しかもだ、それを村人達に見られてしまったもんだから……元から金髪だったために更に妖術師として周りから疎まれるようになってしまった。

いや、まあ完全に俺が原因だが……俺が原因だが!!!

煙が晴れ、首を中心とした肉体に半径五十センチ程の穴が開き身体
の端から手鬼が崩れ落ちていく。

勝ったのだと確信すると身体力が抜けその場にへたり込んでしま
う。やつと倒したのだ……俺が原作を変えたのだ……!!

合計討伐数 6

これにてワイの最終選抜は終わったのだ……

こっからはわからない、全てが大きくズレる。強く……！強くなら
ねば黒死牟が、童磨が居る……この世界の少しの命も零してはなら
ない。誰よりも強く速く鬼を狩る。俺は鬼滅の刃の世界に居るの
ではない。

俺はこの世界で生きているんだ……!!

生涯の友

朝日と共に山を下る。俺、護廷斬魄は破道は出来ても回道は出来ないのだ!! いや、ドヤ顔するべき所じゃねえけどさ……

そして辺りを見渡すも俺以外誰一人居らず、今年生き残ったのは俺だけという事になる。最終選抜はやはりキツイ。俺以外余りこの山で見かけなかったのは殺されたから、なんだろうな。

そう感慨に浸っていると産屋敷家の人が声をかけてきた……

「やあ、お疲れ様。私の名前は産屋敷耀哉。歳は十、一応だけでも次期当主だよ。この選抜、唯一生き残った君の名前を聞いてもいいかな？」

うつつつつつつわ………はあー!!! 語彙が消えた。耳から直接脳に響くかのような声、つい跪きたくなるカリスマ……これが産屋敷耀哉、後の鬼殺隊当主……か。

「ワイの名前は護廷 斬魄つちゆうもんです。これから末永くよろしゅうお願いします。」

そう！俺は平子真子ロールプレイをすることに決めたのだ！髪も金髪だし！おかつぱにすれば平子真子ロールプレイ出来るやろお！そして末永くって意味は言外に柱になるんでこれからよろしくって言う覚悟も込めている、まあ理解はされなくともそれぐらいの覚悟が無ければ原作を変えるなんて不可能だ。己の逃げ道を絶っていく。そうすることで俺は前を見続けられるから。

「末永く……それは君が柱になるという事かい？」

マジかよ産屋敷耀哉………化け物かな？化け物でしたね、この人。ならばここは俺も覚悟を決めよう。カツコよく、華麗に、逃げ道を断ち、このカリスマについて行く。護廷十三隊が尸魂界の為に生命を賭けて戦うように……カツコよくOSRに決めてやろう。

「いや、ワイの刀はお前さんの刀や、お前さんの願いはワイの願いや。やからお前さんの想い、全部ワイに預けエ」

傲慢と笑え、全てを救えなくとも全てを救う覚悟をしろ。何もかも

背負うんだ。そして俺が居る限り必ずイレギュラーは起こる。それに対応できる力を……必ず……!!

「全て背負ってぜえんぶ叶えたる……!!」

「刀……か。斬魄……覚えたよ。君にはいつか柱ではなく刀を名乗ってもらうから死なないでおくれ」

「わかったで」

今更やがこれお館様になんて口の利き方って怒られてもしやあない気がしてきたんやが……

「斬魄、君は、君だけでも私の対等な友人として生き残ってくれるかい？」

セーフ!!! 平子真子に敬語とか無理無理! 想像出来へん! 無理だから友人としてって言われたらしやあない! しやあないなあ!! (やけくそ)

「なんや、ここまで話して、耀哉。オマエは友人やないと言うんか? それこそ愚問やないか? お互いに敬語はなし、気楽に行こうや、ワイだけは絶対に死なへんで……せやなあ、安心して信頼しいとでも言えばええか?」

おおし! 言ったぞ! どや! 平子真子が言うかわからんがぼい台詞は言ったぞお! 御館様も心做しか嬉しそうだし! 俺の勝ちでは!?! ではない?!

「ありがとう、斬魄。それじゃあ」

と言い産屋敷耀哉は箱を取り出す。日輪刀に使う石だ。相変わらず綺麗な鉱石である。

「君の命を賭け、私の至上の獲物となる君の刀に、君の刃に使うモノはどれだい?」

5つの鉱石が並ぶなか、俺は感に身を任せて適当に石を選ぶ。下手に考えるぐらいより楽だし、それにその刀のせいで死んだのであればそれは俺が弱かっただけの話し……簡単に素晴らしい選び方だ。

「おや? 選ぶのが速いね」

流石の産屋敷でも驚きが顔に出るレベルだ……まあ、そりやあそうだろうな。

「では、これで日輪刀を作ろう。君は確か元水柱の鱗滝さんの所で修行していたのだったかな？そこに日輪刀を届けさせるようにしよう。」

テキパキと話を纏め事務的な物は終了し、俺の元に鎧ガラスが降り立つ。なんか物凄く凜々しい……『よろしく』めっちゃイケヴオやんイケケヴオクルとか男の俺でも需要が高いのがわかるぞ！

「さて、斬魄。真面目な話だ。柱になるには十二鬼月の討伐もしくは鬼50体の討伐だ。これぐらいならばきつと君はソツなくこなすだろう。だから十二鬼月を2体以上、そして鬼を100体殺して来なさい。さすれば斬魄、君に柱とは別の特別な地位を与えよう。さながら懐刀……かな？うむ、私ながらいい名前だ。君を懐刀に任命しよう。」

優しいカリスマヴォイスが脳に響くが俺はそれどころじゃない。うっへい、さては産屋敷耀哉……中々なサデイストだな？キツくない？いやまあ、頑張るけれども！鬼100体なんて早々居ねえよ！辛い辛い!!嫌だアアアア！でもやるって言っちゃんだもん！やるしかねえよお！

「わかったで、さすがにその量はすぐには無理やけど、待つとれ必ずその称号、地位を貰いに行くからな」

「ふふ、待っているよ、私の友」

その言葉を皮切りに俺は回れ右をしてこの場から去っていく。向かうはあの邪智暴虐の王が住まう魔王城、鱗滝マウンテン。大魔王鱗滝によって仕掛けられた手加減などまだ理解していない恐るべき罠の数々が俺を殺そうと向かってくる山サイズの拷問器具。俺はそこに帰るのだ……。

右見て？左見て？前後確認、もう一度左右を見て誰もいないのを確認。大きく息を吸ってえー、すうーっ！滅茶苦茶全力でいきをはく。はあああああ、そして口を大きく広げてえ……叫ぶ。

「いたいたいたいたいたいたい痛いよお!!!お母さあん!!僕の身体に絆創膏貼って貰えませんかあ!!?人一人包み込めるサイズの奴でえ!!何があったって？厨二病って言う不治の病が発症したあんです

よおー!!辛い!!泣きたい!!土に還りたい!!アッアッアッアッ
去の俺を殺したい!!」

「アッアッアッアッ もう!やだあああああああ
一思いに殺せえー!!」
!!!!!!
殺せえ!俺を

弟弟子

「して……何か言い分は？」

ハアイ！俺の名前は護廷斬魄！雷の呼吸と水の呼吸の両方を一応はマスターして今では独自の呼吸雨の呼吸を扱う立派な鬼殺隊の剣士さ！まあ鬼殺隊の剣士にしてBLEACHの鬼道さえも使うプロだぜ！

「話を聞いておるのか？」

今どこにいるかって？勿論鱗滝マウンテンさ!!!俺が手鬼討伐に鬼道を使っただって話をしたらさあ……ハツハアWWW

「……ブチ切れだぜおい」

「うむ、話は聞いておったようじゃな？バカ弟子。」

天狗のお面の上からでも分かりやすくキレてらっしゃる、何故でしょう？せやな、俺が使わずに最終選抜突破しろって言われてた鬼道を使ってしまったからやな、ああ犯罪をしたら捕まる。同じ道理だ。しかしマスター鱗滝、手鬼は仕方ないやろ。アンタの責任やで？

「まあまあ、話し合おうぜマスター鱗滝。手鬼は狩った。未来の鱗滝門下キラーはワイがぶち殺したつちゆう事や……な？わかるやろ？」

「ますたー、やらきらー、やらがどういう意味かは知らん。確かに手鬼を殺したのは良くやった。お前の話通りであれば後の儂の弟子を救ったことにはなる。」

邪智暴虐の大魔王、鱗滝左近次の怒りが一瞬也を潜めたかのように思えたが……しかし、伊達に未来の柱を育て、かの山サイズの拷問器具鱗滝マウンテンを作っただけはある。その程度で収まるはずもなく

「それは、それ。これはこれじゃ」

はあい、終わったあ。僕の負け。何で負けたか明日までに考えときます。ほな、頂いちゃってください。

「なあ、いつからワイが鬼道を使ったと錯覚していた？」

「貴様のお巫山戯に付き合うのであればお前が帰った直後からだ」

HHAAW嘘言うなよマスター鱗滝、笑えない冗談はよせ

「貴様が鬼道を使うとな、1日ぐらい手が焦げ臭くなるんだ。どれ程制御が難しいのか知らんが自分の技で自分を傷付けるとは制御が甘いわ」

「そういやあ、このクソジジイ炭治郎レベルで鼻がいいんだった……
「貴様、今儂のことクソジジイとか言ったか？」

「言つてませえーん!!とうとう老衰して耳まで悪くなったか?ああん!
!?頭も悪いのに耳も悪くなるたアお終いだなあ!!ヒヤハハゲブ
ラツツツ?!?!?」

「いつつつつ!!おま、俺のこの時代に比べたら高尚な脳みそが悪く
なったらどうする気だ!?俺はねえ!自分で言うのもなんだけれど
中々な天才ではないかと思うんですよオ!ねえ!!」

「罰として修行メニニュー三倍じゃアホ弟子」

「はああああん?!?!まあ!良いですし!ワイは何処ぞの拷問趣味のクソ
ジジイと違って次期御館様とマブダチ、将来は安泰な訳ですよオ!
わ・か・る?」

「そう言うのと鱗滝は目を丸くして耳をトントン。一度小屋に戻り水
を持ってきて飲む。そしてもう一度耳をトントン。」

「もう一度言ってみよ」

「ワイ 次期御館様 大親友 おけ?」

「そう言うのと鱗滝はまた震えだし震えだすと同時に斬魄は耳を塞ぐ
言つてはアレだが非常に慣れた動きだ。」

「貴様は!!!そこになおれ!!」

「だが断る!!」

「貴様は!弟子達のお手本にも慣れんのかアアア!!!」

「え?弟子?」

「おいクソジジイ!!弟子つてマジか?居るのか?この山サイズの拷
問器具に?!?!」

「なんじゃその言い回しは」

「だってよお、鱗滝さん。アンタ俺が無傷で帰って来ればそれに苛
立つて難易度を全体的に上げてたじゃん。仕舞いには今では殺傷力
がさらにあるものばかり。育てる気が無さそうな山だ。」

それで？その山に子供一人？

「殺す気かてめえ!!」

「儂にだってそんな気は無いわア！」

とまあ鱗滝さんは素の全力で俺は雨の呼吸の歩法で……いや、まあ呼吸と人の足比べるなって言いたいところだが平然と前を走る鱗滝さんパネエ……!!これが元柱……やっぱすげえや。鱗滝さんは。この山は許さねえけれども……!!いやマジで許さねえから。と散々愚痴りながらも必死に子供を探す。

「名前は?」

「錆兎じゃ!活きのいい新人やぞ」

へえー、錆兎かあ……

錆兎おおおおお???

「おい、爺さん、まじで言ってるのか?」

「名前を偽ってどうすると言うのだ?」

鱗滝さんはお面から溢れ出す『こいつ何言ってるんだ』オーラが半端ねえぜ……!!

「……………あ……………ああああああ!!!助けてええー!!!」

「あつちですな」

俺と鱗滝さんは数多の罾を駆け抜け錆兎君と思わしき人物を捕獲。この山に居座るのは危険なので脇に挟んで罾を避けながら撤退だ。しかも瞬歩まで使った特別野外活動という中々にハードな救い方をした。一件落着……それで終わりでよかつたのになあ……………!!

「俺を鍛えてくれ!!頼む!」

俺、後五日後ぐらいに居なくなるんですけれども……!けれども!!そうして長くとも短い最終選抜明けとは思えない苦行の鍛錬の間が始まったのだ……!!

少しの覚悟と少しの教育

「これより！護廷斬魄のドキワク！アルティメット霊圧教室を始める！！！！」

ドーモ、ドクシャッサン。ザンパク、デス！

「巫山戯とる場合かあ！」

「アイエエエエ！ ウロコダキ!? ウロコダキナンデ!?」

打たれた頭が無茶苦茶痛い。このクソジジイ絶対鞘で殴ったな!? 殴ったな!? 親父にも打たれたこと……あるわ、めっちゃあるわ。てか打たれ過ぎて家出したレベルだぜ！まあ親父つつつても養父だけどね！この肉体の親は知りませーん！何故かって!?捨てられてたからさ！

「おんし、またくだらない事を考えているな？」

「いつもだわ、クソジジイ。それで……だ。錆兎きゅん。速くて死にかけるのと遅くて安全なの……どっちがいい？」

速いのは1日で終わる。遅いのは1年。さあ、君はどちらを選ぶ？ 或る意味俺は錆兎を試した。度胸があるか否か……

「勿論……速くて死にかけるのだ」

シヨタ錆兎きゅんはこの歳には似合わない獰猛な笑みを浮かべながら覚悟を決める。いいねえ、可愛い中にカツコ良さが、そして鬼殺隊に欠かせない鬼への憎悪……さあて、原作をぶち壊して貰うぞ。錆兎きゅん。

「了解。死ぬなよ」

つーわけで霊圧ガンギマリ（破道の一 衝）パンチ

鈍い音が森に響き渡り錆兎はお腹を抑えて青い顔をしながら倒れ込んでいく。やったことは単純。雷の呼吸の踏み込みからの全力パンチに俺の今ある全ての霊圧の8割を込めた破道の一 衝をパンチが刺さった直後に放つ。勿論衝撃が逃げないように脚を踏んだ状態で……だ。しかもそれをいきなりだ。死んでもおかしくない……てか、気絶してね？まあこれで霊圧ぶち込んだし、気付くか気付かないか。錆兎しだいやな。

「こんのお！馬鹿たれがあ!!!」

「いつてええええええええ!!!元柱が11のガキに全力で殴るな、ど阿呆!!!」

「それはこっちのセリフじゃあ!!!」

アレ絶対鞘でやったけど水面切りだぞ!?

「流石だぞ！俺が最近丈夫になったことをバツチリと理解してるんだな！」

「うるさいわ!!」

くそう！ポケモン剣盾やりたいぜえ……!!アレ？俺は今何を……。まあいいや、てか俺の頭割れてない？どちやくそ痛いんだが……

「まったく、1歩間違えれば死んでもおかしくなかつたんじやぞ」

「知つとるわ、それでも錆鬼は覚悟決めた。それでええやん。ワイらが口に出すもんちやうで。それにコイツの覚悟は……憎しみは本物や。無茶しかねん。じゃけん、ワイが、ワイらがコイツを強うせなアカン。分かつとるやろ。元柱の師匠なら」

そう言うのと仮面の奥の顔が見えずとも歪んだのが分かった。鱗滝左近次は元柱。故に友を、仲間を、多くの人を目の前で失った。斬魄より鬼の恐怖を、強さを理解している。だからこそ見捨てられない……だからこそ無理な課題を押し付ける。任務で死なぬ様に、鬼に……弄ばれぬように……

「これが一番効率的や、ワイが居れるのは今日を除いて約6日、その間に基礎を叩き込む。後は俺の授業見とつたアンタが教えたつてくれや、ちよくちよく戻るでもしそん時に下手な癖ついとつたらキレるからな」

「キレても貴様など怖ないわ馬鹿弟子。ならばこそたまには戻つて来い。霊圧とやらには詳しくないからな、下手な癖がついとも儂にはわからんぞ」

「ああ、必ず戻ってくるさ……必ずな」

鱗滝の優しさに当てられてか斬魄は座り込み頬を掻きながら錆鬼を見つめる。原作キャラを生き残らせるためにやれることはそこままで大きくない。特にだ11年前の記憶を頼りにというのは中々キツ

イものがある。錆兎に真菰、カナエさんに煉獄さん、獺岳……原作開始前や後……どれだけのキャラが……人が……今では仲間が死んでいくのだろう……これが優しさなのか偽善なのか……分からないからこそ俺は傲慢に全てを救おうと走る。いや、走ろう。

「う、うぐぐぐぐ……」

錆兎が苦しげな声を上げながら起き出す。

「なんや、ジブン。鱗滝マウンテン生き残っただけあるな。これ食らってそれだけかダメージは！しかも霊圧も少し溢れだしとる……！これは成功やな」

「せ、成功……ですか？」

錆兎がお腹を抑えながら立ち上がる。うん、まだ小さい。これから大きく、そして強くなつてもらおう。

「今からお前に教える技術は霊圧の操作や、ワイでさえ未熟や、最低限度の肉体強化と簡単な鬼道つちゅー技を教える。簡単に言えば妖術や。お前の常識を最初から最後まで叩き壊す気で居るから……覚悟せえや？」

目を見てしつかりと声をかける。信頼を得るにはちやんと目を見て話した方がいいで。確実に得や。さあて、ほな、常識をぶっ壊す！

「さあて、斬魄のドキワク！アルティメット霊圧教室……開講や」

すると錆兎は正座をしキツチリと聞く準備を整える。

「ワイみたいな天才目指して、頑張っついていな」

「せや、まだ自己紹介まだやったな」

「ワイの名は護廷 斬魄。後の鬼殺隊 懐刀にして……」

「……死見習いや」

下弦

キングツツツツ!!! クリムゾンツツツツ!!!!!!

逆に考えるんだ!! 主人公以外の修行パ!! 下は飛ばしちやってもいいさ……と。許さんぞゴルゴム!! 何時から俺がキングクリムゾンを出来ないと錯覚していた? なん……だ……と? こいつを見てくれ、人の命を刈り取る形をしているだろう? 答えはNOだ!! ウリイイイイイイイイイイイイイイイ!! 明日って今さ!! Plus ultra!! 三べえだ!! これが本当のゾーン……!! 殺せるといいですねえ……残り三日で。柱に! 俺はなる!! 感謝を込めて……! いただきます! トラップカード発動!! フォースを感じるのだ……! 違う、そうじゃない。これ、そうじゃない? おめでとう君の願いはようやく叶う。

………はっ!!

「どうした? 護廷斬魄殿……」

安定のひよつとこの仮面を被った刀鍛冶の一族の一人刃金卸満久殿が声をかけてくる。おかしい、この一週間の記憶がない。何故だろう……何か忘れた方が良さそう……何か別の作品が多分に含まれてそうな事が起きた気がするのだが……気のせいだろう。

「これがワイの刀……か?」

よく、手に馴染む。まるで何年も握り続けていたかのようにしつくりと、離れがたき感覚。刀を抜こうとすると意思に反してスルツと刀が抜ける。目に見える波紋は水色に輝き俺の適性が水でも雷でもなく、独自の呼吸雨だとわかる。

「ほう……綺麗な波紋だ。幾重にも重なる数多の刃のような波紋が水色に輝いているとは、ここまでの刀を見たのは初めてだ……! これからも俺に頼むといい。全速力で最高の獲物を用意しよう!」

「とーなんー! とーなんー!! とーなんの町に行方不明者多数! 全滅の危機! 至急向かわれよ!」

俺の鋎鴉が俺に任務を知らせる。刀を腰に差し、鱗滝さんに頭を下げる。鱗滝さんに作って貰った羽織を着て外に出る。

「刀、ありがとうございます。では、鱗滝師匠……行つてまいります。」
「うむ、行つてこい!!」

刃金卸さんは何も言わず手を振り、鱗滝さんはその一言を言った後に直ぐに小屋に戻った。さて、東南に向かつて走りますか……!-

擬似瞬歩!!

街を駆け抜け、田んぼを抜けていく。既に常中を取得してる俺としては軽く走るだけなのであれば全然疲れないのだ!!ふは!ふははは!フハハハハハ!!かあけぬけるぜえ!

「団子うめええええええええええ!オバチャンええ腕しとるなあ!」

「はっはっはー!兄ちゃん褒めても出てくるのはお茶だけやで!」

「お茶くれるんか!ほな、貰とこうか!」

ん?今何をしているのかつて?取り敢えず鬼を二匹程狩つて、朝ご飯の代わりに団子を食べている所さ!!ちなみに深夜二時!!これを朝ご飯と言ひ張る人間は俺ぐらいかもしれない……

「さて……腹も満たしたんだ、飯を貰つたものの鬼は鬼、殺さなきゃいけねえ、つーわけでさ」

振り向きざまに一閃。刀を滑らせるも抵抗感が無いことから失敗した事を理解し、続け様にバク転で距離をとる。

「何時からわかつてたんだい?」

団子の屋台のオバチャンの顔が崩れ鬼の顔が見える。

「お前さては馬鹿だな?夜に一般人が団子売つてる訳ねえだろ、それに刀持つてる事に違和感持てやど阿呆、頭沸いてんのか?流石は頭が無残な無惨の部下だな、その知能レベルの低ささえも遺伝するのかわwwコイツア鬼も可哀想だなあ」

取り敢えず煽る。先ず煽る。結局煽る瞳に書いてある数字から下弦の壱だつてことは分かっている。だからこそ霊圧を操作して集める。怒って読み易い攻撃をしてくれたらラッキーつて所だ。

「破道の三十一、赤火炮!!!」

しかし、それさえも余裕を持って躲す辺り流石は下弦の壱……なんだかんだで下弦の壱さえも未だ鬼殺隊は殺せていない。だからこそ今すぐ逃げるべきなのだが……まあ逃がしてくれる訳もなく鎧鴉に救援を求めたので、どれぐらいで柱が来てくれるのか……って所かな。

「ふむ、これが妖術かい？確かに血鬼術とは全くの別物のようだね」

「妖術じゃないんだがなあ、それに鬼と人の技の違いがわかる辺り無惨様の頭の悪さは遺伝していないようだな……うん！やつかいだね！」

ああ！もう！平子ロールしてる余裕ねえぞおい!!!

どうする!?どうやって生き残る!?逃げるか!?いや、それで逃げられたらそこまで被害は出ていないはずだ、どうにか……どうにかして……!!!

「うん、全然違う物だってわかったし、私達には使えない物がわかったからな、お前はもう不要だ」

やべえぞ、おい、不要だと思われた瞬間が俺の死が確定だとは思っていたがここまでか!?いや、死ねないんだが！確実に地雷を何処かで踏んだんだよなあ!!

ああ、煽ったからか

「死ね」

この世界はまったく……簡単に人が死ぬぜ……!!

腹を羽根のようなものが俺を貫いている。いや、辛うじてわき腹とは言え既に意識が飛びかけている時点で俺の敗北が確定なんだが……そうだね、折角だし！啖呵切ろうか。

「いつから……いつから、ワイらが負けたと錯覚していた？」

いや、ヨン様の台詞やけどまあええや

「ほう？」

「テメエらは自分が天に立ったとでも錯覚しているのか？なれば滑稽よな、神さえも、無惨も、鬼も、誰だろうと未だ天に立っていない……」

ああ……意識が飛ぶ……

「ワイの家族が……鬼殺隊が貴様らを殺し、天に立つ」

さらば今世、俺の家族である鬼殺隊に幸福あれ……

そして、護廷 斬魄は地に伏した。

温もり

暖かい……

身体を包む暖かい空気が俺自身が死んだことをしっかりと理解させる。太陽の如き温かさにそのまま眠ってしまいたくなるが目を開けられる事から取り敢えず目を開けることにする。

しかし、目を開けてすぐ後、俺は後悔した。

「重役出勤じゃのう?」

「なんだ、夢か」

すぐさま身体を床に放り投げ大の字に寝転がる。

「さっさと立たんか戯け!!!」

「はい!!!山本元柳斎重國総隊長!!!」

見間違えるものか……どれだけBLEACHを読み込んだと思っている。俺が死んだ時はフルブリング編の終盤。藍染惣右介が一護に最後の月牙天衝で敗れた後の一護が死神としての力を取り戻す話だ。どれだけ次の話を読みたかったか!!!そして、今!俺の目の前にはあの伝説の男……山本元柳斎重國総隊長が居る。最強の斬魄刀流刃若火。卍解後の太陽の斬魄刀!!ならば仕方ない!太陽の如き温もりは流刃若火の余剰エネルギーなのであれば!俺は幸せで死ぬる。

「ふむ、少しはマシな顔になったか。」

「ハッ!大変失礼な行動に言動!申し訳ありません!!!」

すぐさま膝をつき、頭を垂れる。

「して、何故俺はここにいますのしょうか……」

正直だ……興奮で身体の震えが止まらねえ!

「護廷 斬魄……まったく、名が体を表すとはこのことよ……」

え?まさか?転生特典って奴つすか?既に鬼道使える時点で俺もうちートでは?では!?

「汝には全ての斬魄刀が宿って居る。或る意味では護廷十三隊を背負う男よ」

「な、はあ!?!待ってください!恥ずかしながら自分は多くの斬魄刀の始解に名前を言ってみました!しかしながらどの斬魄刀も反応せず、

無駄な行為に終わりました！今自分が使えているのは斬魄刀では無く、鬼道です！」

「ふむ、鬼道が使えるのは斬魄刀の影響じゃろう。そしてじゃ……」

一瞬で雰囲気が変わる……目に見える程の霊圧が斬魄自身に未だかつて無い恐怖を与える。

「始解とは儂らが斬魄刀と分かりあつて初めて使えるモノじゃ、貴様の様な若造がそう簡単に始解を習得出来ると思うな……い！」

その一言が恐怖や絶望さえもかき消して理解出来た。

ああ、そうかそう簡単に習得出来ないだけで習得は出来る。一度は夢見たあの斬魄刀を使うことが出来る可能性があるのだ。そう考えると段々と気持ち昂つていく。そうだ、そもそもそう簡単に始解なんて使える筈が無いんだ!!何故それを理解して居なかつたのか。そんな直ぐに始解が出来たらオサレじゃないだろう！

「ふむ、理解出来たようじゃな？」

「ええ、ありがとうございます。自分は大馬鹿者だと理解出来ました。」

「そうかそうか、してじゃ。本題に入るぞ？」

霊圧を納めた総隊長は嬉嬉として笑う。

「ふむ、儂が……いや儂らがここにいる理由じゃがな……」

そう言うその後ろに気配を感じて振り返る

「なんや、ジブン気配は読めるんか」

「ギン、それは失礼じゃない？これでも立派な鬼殺隊の剣士なのよ？」

「乱菊、鬼殺隊の剣士以前にまだ十一や。まだまだ子供、危ないことしてるのには変わりないで？」

そこに居たのは護廷十三隊三番隊隊長市丸ギンと十番隊副隊長の松本乱菊。そうギン乱カプである……!!この景色が斬魄の心に多大なダメージを与える。

「儂らがここにしている理由じゃが、お前に斬魄刀を二振り授ける。」

その言葉に耳を疑う……二振りも使うことが出来るのかと感動し

つつも総隊長の言葉を聞き逃さないように集中する。

「斬魄刀の始解を使えるようになる条件じゃがたったひとつだけ……

……………斬魄刀の持ち主である死神に認められることじゃ」

あれ？ならば俺は死神に認められたと？誰が!?

「だ、誰が俺を認めてくれはったんですか!?!」

そう言うのと不意に肩を組まれ左を見るとギン隊長の横顔が見え一言

「ボクらや……ボクと乱菊の二人や」

真剣な顔を浮かべゆつくりと頭を撫でてくれるギン隊長に段々と涙が止まらなくなってくる。自分に親が居たのならばこんなにも暖かい温もりを与えてくれる人だったのだろうか……そう考えずには居られない。

「斬魄は十分頑張った。二番目に試した始解もボクやった。親の顔も知らず飢えに耐えながら頑張ってきた。そして鬼殺隊つちゆう家族の為に全てを賭して戦った。だから、ボクと乱菊にとっての息子みたいな斬魄に対する父親と母親からのプレゼントや。」

もう、止められないだろう。俺は総隊長の前であることも考えず、ギン隊長と乱菊副隊長に抱き締められ……声を上げて泣いた。自分の行いが今までの戦いが全て認められた気がした。でもだからこそ泣き続けているうちに理解せざる負えない。

まだ、戦いは終わっていない。あの鬼を殺さねば。鬼殺隊に、俺の家族が泣かんでも済むようにするのだ。

「覚悟は決まったようやな、ほな戻り。刃禪すればここには戻ってこれる。だから、今は成すことを成しい」

二人は俺から少しづつ離れて行く。

さあ、行こう。俺が未来を変えるのだ……家族が、誰もが泣かんでも済むような世の中を俺が作るのだ。

「ほいなら、行ってきます。総隊長、父さん、母さん」
最後の瞳に映ったのは嬉しげな父親と母親と総隊長の表情だった。

二人の覚悟

「行ってしまったわね」

松本乱菊はゆっくりと座りながら呟く

「せやなあ、ホンマに真っ直ぐ綺麗に育つとるわ」

「ギンと違って正直者だけれどもそれでも貴方と似たようなこと言つてたわね」

「でも、髪の色は完全に乱菊よりやで？」

「ほっほっほっ、子供の成長は早い。市丸ギン、松本乱菊。あの子に一番感謝しているお主だからこそ、しっかりと親として接してあげなさい。それが市丸ギン。裏切りの罰じや。ちゃんと向き合つてお主の全てを伝えよ、よいな？」

そこには総隊長としての表情とまるで孫を見るような表情が合わさったような顔をした山本元柳斎重國が立っていた。やはりこの男は少し変わったのだとわかり、少し不思議な感覚になるギン

「ありがとうございます。総隊長。」

「ふふふ、でもあの子の事だもん私達の始解の使い方を理解しているのなら直ぐに使いこなすんじゃない？」

「無窮瞬間やったか？ 碎蜂や夜一さんが使つとった技は、アレも教えて貰えるように頭下げに行かんとなあ。やる事がいっぱいで大変やわ」

やれやれとした風貌を見せるも口元は自然な笑みを浮かべていた。あの頃の貼り付けたような笑みではなく。最期にみせたあの笑みのように。

「ほな、見してもらおうかな。ボクの神槍を使いこなせとるか……」

「ちよい待ちい、十二鬼月」

「ほう……っ？」

俺はボロボロになりながら、血を垂れ流しながら立ち上がる。血が溢れて口からも垂れる。もうボロボロで立つことが辛いけれどもそれでも

それでも……！

「負ける気はしねえなあ……！！」

「もうボロボロで救いようの無い貴様に何が出来る？」

「逆転……！！」

俺な顔を見て嬉しそうにするこの女はどこまでも……

「私は見誤って居たようだな。名を名乗ろう。十二鬼月が下弦の壺。絹だ。下弦の壺として全力で相手をしよう。」

どこまでも鬼なのだろう……鬼は……いや、絹は鬼には似つかわしくない優しい笑みを浮かべ、その獲物である羽根を広げる。羽根だけでなく爪も伸び肌が黒くなっていく。

「ワイの名前は護廷 斬魄。未来を変える死神や……！！」

覚悟を決める。それこそもう負けることは許されない。俺は護廷十三隊を背負っているのだ。そしてあの市丸ギンの斬魄刀に松本乱菊の斬魄刀を持っている。あの護廷十三隊の隊長と副隊長の魂を背負っているのだ。負けない。否、負けるはずが無い。

「血鬼術 黒翼巨爪」

「射殺せ……『神槍』!!!」

一瞬で伸びる刀身が巨大な爪と翼を突き抜けるモノの数センチが届かない。一撃で仕留められなかったのは俺の落ち度だ。最速最長の斬魄刀である神槍が止められたのは正しく実力だろう。四枚ある翼の内三枚を貫くも歴戦の鬼だけあるのか翼の角度を変えることで刺しづらく、また刀身を捕まれかけたのだ。引かざるを負えない状況まで持ち込まれるとは闘い上手と関心をしてしまう。

「まさか、刀まで妖術とは……」

「神槍・乱舞」

音速の十連撃、これが神殺槍であれば一撃で終わっていただろう。神殺槍の真骨頂は刀の中身である毒だ。一撃刺されば再生を許さず、確実な死をもたらす。ただの神槍で出来るのは脇差し百本分伸ばすだけ。だからこそその速度を最速にして刺し抜きする。単純な技だ。だからこそ強い、だからこそ怖いのである。だがしかし、流石は下弦の壺と言えるだろう。急所を的確に守り、鬼の余力で近くまで駆け抜けてくる。

「舐めるなあ!!!」

「唸れ『灰猫』!!」

刀身が一瞬で煙になり、斬魄の周りが煙に包まれる。

「猫輪舞!!!」

その叫びと同時に一気に煙が溢れ出し、絹を包み込む。しかし相性が悪かった。しかも壊滅的に……危険だと瞬時に判断した絹は再生させた羽根を大きく振り回し風を起こし灰猫の煙を吹き飛ばす。だがその瞬間に羽根を大きく切り刻み大ダメージを与える。

「まったく、他の下弦では確実に死んでいるな。やはり、ここで殺さねば行かん……」

「絶望的に相性が悪いなあ……刺しても止められ決め手に向け、煙は吹き飛ばさせる……しかもワイはここまでボロボロ勝ち目は低い……だけどな、負ける訳には行かへんのや……!!」

身体が絶望的に重い……だが、ここで動かなくて何時動く。

「身体はボロボロ、霊力もキツイ。斬魄刀も中々意味をなさない。ああ、死にたくねえなあ。」

「ここに来て弱音か? いや、貴様がそんなタマではないことは分かっている時間稼ぎか?」

「いや、正直だ。勝ち目が無いのは分かっているんだ。身体技術もまだまだ、ワイは十一歳やぞ? もっと後に来てくれよ!」

「私からしたら今ここで貴様と戦えたことが嬉しいぞ。脅威となる前に殺せるのだからな」

そう言うと言はゆつくりとこちら側に足を進める。

しかし、神は……いや、あの男は見放さなかった。

『一回だけ手え貸したるわ、身体貸しな?』

そう言うのと問答無用で身体の権限を奪い取る。そうすることで髪の毛は一瞬で銀色に染まり雰囲気がガラリと変わる

「すいません、父さん」

その一言を最後に身体最後の権限を市丸ギンに渡した。

その変わった雰囲気に一気に警戒度を上げる絹だが、今……たった今この変わった瞬間に警戒という言葉と行動は意味を成さない。

「息子が世話になったなあ」

なぜならば、かつて護廷十三隊の全てを欺いた男の強さは本物であり……あの藍染惣右介を一番早く追い詰めた男だ。その背中に一時背負った三の数字と金盞花と言う花の持つ意味は……甘くない

「これはボクからのお礼や」

絹は瞬時に羽根の硬度を最大限まで上げ防御体勢を取る。

しかしその行為の全てが無意味だ。

「射殺せー『神槍』」

剣の刺し方が違ったのかその衝撃で絹は少し離れた木に叩きつけられる。

「使い方はまだ未熟、ボクの斬魄刀の真骨頂はその速さと長さや。それを活かす戦い方をしなあかん。だからこうやって距離を取るんや、ジブンが取るんやない、相手に取らせるんや」

絹は瞬時に全力で距離を詰めに行くが、市丸ギンの前で距離なんて無意味である。また同じように距離を取られゆっくりと斬魄の皮を被ったギンが喋り出す。

「この解説も前にしたことがあるわ、絹さんやったか?この刀、どれぐらい伸びるか知ってる」

「知らないね」

そう応えるとギンはニツコリと胡散臭い笑みを浮かべながら嬉しそうに話を続ける。

「刀百本分や、しかしなこの刀はまだ進化するんや。どれぐらい伸びるかわかる?」

「私は問答をしに来た訳じゃないわよ」

「あれ、降参なん?つまらんなあ」

そう言うのとゆつくりと身体を斜めに向け刀をゆつくりと下に向ける。

「しゃあないな、ようわかるようにキミらの長さで教えたるわ」

そして下を向いていた顔がゆつくりと上げられる。ゆつくりとそして蛇のような笑みを浮かべ……

「3. 3里や」

「なっ……!」

「……ピンとけえへんやろ、数で聞いても。」

「だから見したる。」

「いくで今度は……息子とちやう、この刀の本気や」

直感的に危険なのを理解したのだろう瞬時に身体全身を硬め完全防御体制を取る……だからこそ何度でも言うべきなのだろう。市丸ギンの斬魄刀、神槍の前に……防御体勢を取ろうとすることは殆ど無意味だと。

「卍………解………」

「死せ 『神殺槍』」

アドバンス召喚

「あ、母さん。」

「あら、やっと目が覚めたのね」

目が覚めると、いや目が覚めたは目が覚めたのだが心象世界に居た。心の中で決めた事なのか、それとも俺の心の変化が影響しているのかあの松本乱菊を母さんとしか殆ど呼べなくなっている。

「あなたのお父さんは今、色んな人に頭下げに行っているのよ?」

「え?何ですか?」

え?何で?アレか?裏切ったことを今更謝っているのか?いやでも、それは母さんのためであって……いや、沢山殺しはしたけれども……

「斬魄はまだまだ霊力の扱いが下手くそでしょう?」

いや、もつとほかの言い方は無いんか……

「いや、まあそうだけれど他に言い方ないの?」

「無いものは無いわよ、それに日番谷隊長は才能派だから、意味無いのよ。そうになると他の人に頼まなきゃって思ったんだけど、したらギンが乱菊は斬魄の事頼んだで、ボクが行ってくるからだってさ」

え、え、え!それ無用なトラブルを産むのでは?

「だ、誰の所に行くって?」

「まずは夜一さんと喜助さんだって、一護達に手を貸したならきつと教えてくれるし、無窮瞬間も教えてもらえば一石二鳥だって言ってたわ。後は浮竹さんに平子さん、朽木家の二人に碎蜂さん、握菱大鬼道長、そして卯ノ花さんだって」

「え、!?超大物ばかりじゃん!何で!?何で!?てか父さん無事で帰って来れるの?ねえ!?ボコボコにされない?朽木ルキアさん以外みんなからボコボコにされないそれ!」

え?生贄?生贄なの!?生贄(市丸ギン)を代償に死神達をアドバンス召喚なの!?

「本当に市丸ギンを父親と呼んどんじゃのう?」

「ははは、夜一サン。ギンサンも成長したってことですよ」

「納得するのは大変じゃけどな。」

「……………え？いやははは、冗談はよせ。音も気配も何もないのに、いや、1人の足音と気配はなんとなくあるけれども……………もう1人の足音も気配も全く感じなかったんだけど、え？これがプロって奴ですかねえ！」

「ふむ、喜助には流石に気付きおつたが儂を捕らえようなど千年は早いわど阿呆。」

後ろを振り返ると褐色美女と胡散臭いおっさんが1人づつ……………

「よ、夜一さんに喜助さん……………」

「正解ですよ、護廷サン。つい先程貴方の父親を思いつ切りぶん殴つた夜一サンとこの後も問題を起こしそうだからと市丸サンに碎蜂さんを同行させた優しい浦原です。」

「え……………」

「斬魄には感謝しとるが認めては居らんよ、しかしそれとは別に死んでもらつては困る。つまりは儂らの事情じゃ。斬拳走鬼しつかりと学んでもらうぞ。ちなみにじゃが儂が走の部門を教える。鉄斎が鬼道を教え、碎蜂が白打、恐らくじゃが斬と回道合わせて卯ノ花じやろう。それをサポートするように他の隊長格、そして雑学その他の戦い方などを喜助が教える。寝たらここじゃ、寝ずとも刃禅してここに来い。最低でもこれぐらいしてやつとあの負けた下弦の壺とやらに斬魄刀を使わずとも勝てるようになる。」

何故か俺の拒否権とやらが消え失せた気が……………

「さらにじゃ、斬魄刀が使えるようになる度にその斬魄刀の使い方もしっかりと理解してもらおう。ちなみにじゃがこのメニューは儂が考えたものじゃない、総隊長が考えたものじゃ。じゃから死ぬ気で取り組めよ」

てか、父さん夜一さんに全力で殴られたのか……………いや、まあそれで蟠りが消えてそうだから流石だよ……………

でもさ、母さん。なんでそんなに可哀想なものを見る目でこつちを見るの？ねえ、何で!?めっちゃ不安になって来たんだけど！

「ふう、頑張つてね斬魄」

「見捨てたのよね?!?母さん今見捨てたよね?!?」

「母さん応援してるから」

確実に母さんが見捨てた目をしていることに動揺を覚えるが良く考えてみよう。

瞬神夜一に瞬歩を習い、二番隊隊長に白打を習い、大鬼道長に鬼道を習い、初代剣八に剣術と回道を習い、元技術局局長に雑学を習う。

うわ、下手したら俺死ぬぞ？

「何、兄が心配する事はない。兄には感謝している。」

「ええ、姉様にもまた会うことが出来ました！私でよければ幾らでもお子さんに力を貸しましょう!!」

朽木白哉さんにルキアだああああああ!!!てか今の会話から推測するに緋真さんも居るってことか!!やばい、感動。

「なんや、このガキがギンが言つとつた息子か……ホンマにガキこさえとるとはなあ、あの阿呆と違って真面目そうやなあちゆうことは母親似っちゆうことか。良かったなあガキンチョ、父親似やったらお前、行きづらいぞお」

肩を組まれ、十一年前散々と漫画を読み返し、尊敬した男が今、俺に肩を組んでいる?やばい、肩洗えないっちゆうか待ってマジで居るの!?

「ひ、ひひ、平子真子隊長?」

「なんや?ワイの顔見ても別人や言うんか?」

「ほ、本物の?」

「お前さては馬鹿か?」

「本当の、本当に?」

「わかった、お前は馬鹿や。」

ほ、本物の平子真子やつ!!サインサイン、サイン貰わんと!

「ファ、ファンです!あ、あの!」

「ああ、知つとるわ」

も、もしかしてこれは?

「い、何時からファンだと?」

「んなもん、決まつとるやろ……お前が乱菊の腹ん中居る時からや」

「ふああああ!!!」

もう!もう!!!感動!!

と斬魄がテンション上がって叫んでいるとゆつくりと平子隊長の背後に影が……

「馬鹿真子!何言つとるんや!!セクハラやぞ!しかもちよい、不自然や!!!」

「んな!ひよ里!んな頭打たんくつてもちよつとこれは無理があるなあとかは流石に分かるわドアホ!!」

猿柿ひよ里副隊長も現れ段々と周りがうるさくなつてくるが同時に意識も遠くなり始める。恐らく現実での目覚めが近いのだろう。この風景から目を離すのも惜しいが今は現実に戻らなければいけない。

「平子隊長、母さん、行ってきます!」

「いってらっしゃい、斬魄」

「いたたた!おう、すっかり迷惑かけた奴に謝れよ」

そうして俺の意識はゆつくりと現世に浮上した。

拙い覚悟

「知らない天井だ……」

やったあああああああ！何時かは言ってみたいアニメの台詞ラ
ンキング第八位『知らない天井だ……』が言えたぜえ！

「やあ、お目覚めかい？斬魄」

こ、この耳障りのいい声は……！デンデレデーン（セルフ遊戯王B
GM）

「輝哉ってことは、まさかの鬼殺隊の産屋敷邸か？」

わーお、右を見るとあらま、綺麗な日本庭園。これはアレですねア
ニメでやってた柱会議の場所ですね。

「んー、怪我の治療はここで行ってるのかい？輝哉」

「いや、本当は違うのだが君が下弦の壺を倒し大怪我をしたと聞けば
この場所ぐらいは提供するさ。まさか最初の任務で今まで誰も倒せ
なかった下弦の壺を倒して来るとは流石は私の懐刀になると言うだ
けはあるのかな？」

輝哉は嬉しそうな顔をしながら遣いの者を呼び俺の包帯を変えさ
せている。

「てことは、アレか。ワイが特別なのか」

「まあね、それで？鏝鴉から聞いたよ、妖術を使うそうだね？しかも鬼
に効果的な……」

あーらら、気付かれたかあ、まあ気づかれるとは思ってたけれども
早いなあ……バレルの

「んー、妖術とは違うぜ。まあ知らない奴からしたら妖術何だろうけ
れども知ってるワイからすりゃあ、アレは別モンや」

すると、産屋敷耀哉は悩みだし、そして俺に聞いてくる

「詳細を聞いてもいいかい？」

きつと、触れたら戻れなくなるだろう、ある意味妖術などが排斥さ
れていつているこの世の中で『それ』を知る事は罪となるだろう……
しかしその瞳は決意に満ちていた。自分はそれを知っている上で聞
くのだと覚悟が見て取れる、いや、この歳でどんな眼してんだよ……。

直ぐに使用人を部屋から追い出し自分の鎧鴉を使って付近の生き物を近寄らせないように命令を出すとその場に座り直す。

「この力は霊圧つちゆうもんや、一般人には使えへん、見えへん、覚えられん。しかし一つだけ例外があるとすれば才能があるやつや」

「才能……ね？君は誰かに教えてもらったのかい？」

「馬鹿言ったらアカン、ワイは自力や。この力使つとつたら知らん奴に名前と使い方、色々学んだんや」

息を吸うように嘘を履いていくうー☒？ ☒？☒？

「なるほどね……続きをお願いするよ」

「才能がある奴には無理矢理霊圧を使えるようにすることが可能やが才能ない奴、輝哉もそうだが一切使えん。才能がある奴は極力能力を活性化させているがどれだけの人が使えるようになるか……つて所やな。まあつっても使えるやつがまず居らへん！ぜんっぜん見つからんけどなあ」

いや、なんで錆兎きゆんは霊圧があつたんやろ……

「そして……や、刀の妖術。これに関しては俺だけの力や、誰も真似することは出来ない。」

逆に斬魄刀を他の輩が使えたら俺萎えるで

「それは……才能ある者に君が教えてもかい？」

「ああ、これだけは恐らくな……」

まず浅打ねえしな、浅打あつたとしても無茶苦茶時間かかるしこれで鏡花水月とか目覚めてみるよ。死ぬぜ。俺が。しかも、俺は浅打無しで転生特典？多分、で使ってるから本当はどうなのか知らない。

「ふむ、わかった。」

輝哉は理解を示してくれてゆっくりとその場に立ち上がるも少しふらついた。

「もしかして病か？」

産屋敷家の寿命は家系から鬼を出してしまったことよって代々短い。しかし、もうこんな歳から病にかかってしまうのか？ならば回道でどうにか出来ないか？そう考えられずにはいらなかった。

「産屋敷家は代々長く生きられない。今はまだ多少の貧血で済んでい

るが……年々病は悪い方向へと進んでいくだろうね……出来ればだが、君と同じ時を過ごしていたいんだがね……私には厳しそうだよ、しかしだ……斬魄」

輝哉はふらついた身体をしっかりと立て直し決意と大きな自信を持ってニツコリと笑った。

「私には見えるよ、君に倒される十二鬼月が、そして鬼舞辻無惨を打倒するその姿が。まだまだ君には成長の余地がありその状態で下弦の壺を倒したんだ。私達の世代で全てを終わらせる……」

すると、輝哉は俺に手を伸ばし膝をつく

「私と共に戦ってくれるかい？」

多くのものを観た気でいた。多くのものを護らなければいけない気だった。多くのものを失わぬ様に戦う気だった。その全てがする気だった。する気で終わっていた。

こんなひとケタの餓鬼が覚悟決めてるんだ……早死することを悟りそれでも尚未来のために自身のできることを行い、世界をより良い方向へと進もうとしているのだ……

ここに誓いを

「もう一度誓うで、今回は十二鬼月が下弦の壺を”初めて”倒した鬼殺隊の剣士として言わせてもらう」

すると、産屋敷耀哉はしっかりと目を見つめてくる。

「ワイが……俺と輝哉の二人の世代で全てを終わらせる。お前が指示を出せ。俺が殺そう。お前だけじゃ勝てない、俺だけでも勝てない。お前が率いる鬼殺隊の先頭に俺が立って初めて鬼舞辻無惨を殺せる。この世代で全てを終わらせるんだ。だから、後ろは頼んだぜ輝哉」

産屋敷耀哉は少し笑うと俺が掴んだ自分の手を思いつきり上下に振り初めて見る子供らしい笑顔で胸を張る。

「ああ、私に後ろは任せたまえ！しかし、その代わり前は頼んだよ？」

だから俺も全力で腕を上下に振り返す。

「勿論だ」

此処に未来を背負った未来の御館様と未来の鬼殺隊最強の剣士が契約を交わした。

もはや、畏れるべき敵は無し。

ここに、確定的な鬼舞辻無惨の死が確定した。

実はこの会話を聞いていた控えの使用人が使用人に広め、それをたまたま通りがかった陰の者が聞いてしまい、それが巡りにめぐり数十年後まで語り継がれる一幕だとはそのころ二人は気付いてなかった。

余談だがこの後産屋敷耀哉が出ていったあと自分の発言に身悶えする後の懐刀と御館様が居たとか居なかったとか……

確かなことは……今はまだ……わからない

背負う名

俺が鬼殺隊に入隊してから一年が経った。俺の階級は甲、既に鬼の討伐数は百を超えており、今回の下弦の肆を倒すことでひと月前に当主となった輝哉により輝哉の懐刀として任命される。この一年で俺もまあだいぶ成長した、まずおかしかったのが寝てる間の空間が精神と時の部屋だったことだ。一時間刃禅したとしよう、精神世界では三時間過ごせる。まあ、実質三倍の時間鍛えられるというわけだ……いや、マジで辛かった。

しかしながら、その鍛錬のかいもあつて一年間で新たな斬魄刀が幾つか手に入った。それを一つづつ紹介することにしよう!!

まずは三本目の斬魄刀、剡月。そう!あの黒崎一心の斬魄刀だ!しかし、焔熱系の斬魄刀な為多用することが出来ない、悲しい。

次は四本目の斬魄刀、まさかの天狗丸である。羅武さんとジャンプ談話をしている際に、わかつてるじゃん!とまあ、違う形とは言え認められた結果である。

五本目!金沙羅である。理由は羅武さんと同じである。と言うか、羅武さんが先にローズさんのジャンプを読むのが悪い。あれは完全に羅武さんが悪い、戦犯である。

そして、六本目だが……お、見つけた

「吹っ飛ばせ!『断風』」

その解号と共に全力で断風を振るうと風が糸状に延びそして、鬼の背後から鬼の首を切り落とす。鬼が気づいた頃にはお終いである。俺の索敵範囲に入り、断風の射程に入った時点で負けなのだ。

とまあ、ヴァイザードの皆様方とても仲良くしているが未だ平子隊長には認められていない。

しかも、まだ俺の斬魄刀はあるぜ。と言うか今認めてもらった皆様方は甘いのだ、六車拳西隊長なんかは漢気があったからなんて言う理由である。らしいと言えばらしいが流石としか言いようがない。

七本目エ!袖白雪イ!ルキアは俺を弟かなにかのようによく扱ってくるのか俺が80番代の鬼道を使えるようになった瞬間によくやった

と直ぐに認めてくれた。何処その一心さんとは違い氷雪系の斬魄刀
な為すつごい使い易い。まあまあ、愛用している。

八本目の斬魄刀、まあ、ラストなんですけれども、そう！あの斬魄
刀！尸魂界に二つしかない双剣の斬魄刀、双魚理である。しかもこの
世界仕様に変わっており

「波悉く我が盾となれ 雷悉く我が刃となれ『双魚理』」

二つの刃にその間を繋ぐ縄。マジで、この見た目好き。浮竹先生の
認める条件は浮竹先生のテストで百点を取ること。これが本当に難
しいんだ、ルキアなんて頭抱えていたぞ。と言うか父さんは平然と百
点取っていたけれども母さんは四十点代だし、死神としての最低限の
知識は三十点程なので合格ではあるのだろうか……いや、まあ、原作
知識あつてよかった。

そして、飛んでくる岩石を双魚理で跳ね返す。

そう！そうなのだ！双魚理は岩や木などだろうと鬼の攻撃と認識
した全てのものを反射するというチート斬魄刀となったのだ!!まあ
綺麗に跳ね返すこと自体がすつごい難しいんだけれどね？

さて、あのでっかいのが下弦の肆かな？確かに大きいなあ、うん、で
もあれよく昼間にバレないな。という訳で

「奏でろ『金沙羅』」

デカイ的なら今の現状、金沙羅が一番だ。

流星にこの距離だと気付くかあ、まあ知ってたけれど。

「だからと言って、ワイを補足できると思っとるんやったら頭が可哀
想や」

瞬歩を使い瞬時に距離を詰め、一撃

「金沙羅奏曲第十一番『十六夜薔薇』」

鞭を指で演奏するかのように奏でること下弦の鬼は連鎖的に発
生する爆発に吞まれていく。さらに、連続で十六夜薔薇を放つ事で継
続的にダメージを与えていく。

さらに、斬魄刀をチェンジする。

「燃えろ『剡月』」

燃える刀身を上段に構えて首の真後ろから首を狙い全力で振るう。

「月牙天衝!!!」

声と共に響き渡る巨体が倒れる音。木々は燃えるも、下弦の肆が確実に死んだ事を理解する。

「やっぱり月牙天衝はカッコイイなあ、オサレだぜ」

「カァー!直ぐに産屋敷邸に集合せよ!カァー!直ぐに産屋敷邸に集合せよ!カァー!」

「わあーったよ、瞬歩で向かうから、後でちゃんと来いよ」

そう、自分の鎧烏に伝えると全力の瞬歩で産屋敷邸に向かう。ここで、お前一人で行けるの?って思ったやからも居るだろう。行けるのだ。俺はなんと産屋敷耀哉本人にこう言われている。

「友人ひとり来ない家とはあんまりにも可哀想じゃないかい?私だって君と色々話したいんだ。だからこそ一人の友人として私の家を知っていておくれ」

とね!!

だから、俺は行けるのさ!と、言っている間に着いたね。

「やあ、輝哉。なんの用事や?」

「おい!貴様ア!!お館様の御膳であるぞ!口を慎めえ!!」

「構わないよ、宗浄。彼は私の親友で、懐刀だ。そして、この場で宣言しようじゃないか、なあ?斬魄。」

「せやなあ、ちよい最近柱が煩いで早く俺の立場を示してや」

「護廷斬魄。下弦の壱含む十二鬼月二体の討伐と147の鬼の討伐、特殊技能である鬼道の発見を考慮し君には私直属の鬼殺隊の剣士としての名、『懐刀』を与えよう。この地位は柱と同一の権限を持つ。このことを鬼殺隊全隊士に伝えるように」

こうして、護廷斬魄は懐刀に就任した。

殲滅戦

懐刀に就任してからなんと6年経った。そんな僕は何をしているのかって？

「千手皎天汰炮!!!」

山に潜む多くの鬼を一撃で葬り去っているのさ。詠唱はして発動は出来たものの威力はまだまだ低い。十二鬼月であれば当たり前のように生き残るであろう。今この山には恐らく下弦が2体存在しており、既にこの山で柱が2人行方不明となっている。結果としては俺とこの6年の間に入った新しい柱の2人と共に討伐に向かうことになったのだが……如何せんこの山にはアホ程鬼が居るので2人とも殲滅には適していないから(そもそも殲滅に適した呼吸ってあるんですかねえ)俺がパーツと殺すことにしたのだ。そして、聞いて驚け新人の柱2人だが……

「なんとということだ……見ずともわかるこの闘気……これは……また腕を上げましたか……?」

「はっはっはっ!!ド派手だなあ!おい!」

……悲鳴嶼行冥と宇髄天元である。新人の柱だが戦闘力がバカ高いのだが……だがなあ……相性が悪い……

「オマエら、戦えるんか?」

「ああん!?!勿論ド派手にな!!」

「目が見えぬと侮られては困る」

「行冥、オタク目が見えとらんのなら何で周りを判断しとるんや?それと天元、オマエの呼吸は何が特徴の呼吸や?お?言うてみ」

凄まじく馬鹿なのではないだろうかこの2人は……

「それは音や気配匂いなど様々ですが」

「んなもん、ド派手さだろう!」

「天元は音を大量に出し、行冥は音を頼りに動く……オマエらもう一度聞くで、ほんまに戦えるんか?」

ほおら、止まった。考えてなかったぞコイツら、絶対に鬼殺したいだけやろこのバカ共。

と言っているうちに山の入口に差しかかる。時間は夜、大量に減った鬼を認識しながら身体を解す。

「まあええわ、ワイが真正面から叩く」

その一言で2人が正気に戻って反論しようとするが言葉を続ける。

「天元、お前は左、そいで行冥は右や。離れとつたらお互い全力を出せるし処理も楽や、ええか？鬼を1匹たりとも逃がすなよ？」

天元は笑いながら、行冥は泣きながら頷く

なので、喝を入れる

「わあつたら返事せい!!」

「お、おおう！」

「わかりました」

まったく、緊張感のない奴らだ……と愚痴を零しながら振り返るとしっかりと引き締まった顔になっているので安心して、戦闘準備を行う。

既に隠の人達による処理の準備と一般隊士による包囲網は完成しており、後は懐刀である俺と柱の2人が突入して中に居る十二鬼月を討伐するだけの状態。

ゆつくりと、護廷十三隊の隊長に配られる、数字の所に『殺』の字が書かれた羽織りを地面に畳んで置き、瞬光用に魔改造された隊服が月光の元に輝く。

「ほな、突入や」

この一言と共に俺、天元、行冥は山に突入する。

「唸れ『灰猫』」

入ってすぐに大量の細かい鬼が現れるも全て灰猫で処理を行う。風が無い分灰猫は思いのままに自身の周りを覆い外敵を殺し尽くす。鬼が意外と多く生き残っていたことが一番の疑問だがこの山はよく見ると至る所に横穴が掘ってあることからそこからそこに退避していたと思われる。中々に知恵の回る鬼が居ることは明確だった。

「さてさて、おーにさんこーちら、手えーの鳴あるほおへ」

と巫山戯ながら手を叩くと鬼が数体躍り出てくる。馬鹿である。

だがしかし、釣れたのは雑魚だけじゃなく強者も呼び寄せていた。

「君は強いか？」

よく分からん鬼が話しかけて来たが眼を見るに下弦の式……以前戦った下弦の壱よりは格がしたが、侮って勝てる程俺は強くない。刀をゆつくりと下に卸し、やつとの機会に俺の気持ちは昂っていく。

「んなもん、やってみなわからんやろ」

「ふふふ、そうだなあ、殺して見なきやわからないよなあ」

「ほお、結果論か」

「くくく、いざ尋常に……」

眼の前から鬼が消え突如上からカカト落としが振り落とされる。

「勝負!!」

すんでのところ回避して赤火砲を詠唱破棄で唱えるも右腕を犠牲に耐えにつこりと微笑んでくる。

「不思議だア！不思議だなアアア!!!!妖術か！妖術使いか！鬼殺隊の剣士ではなかったのか？いや！もはやそれはどうでもいい！」

技が苛烈になっていき捌くのが辛くなってくる、鋭く重く速い一撃が交差する腕を殴り飛ばし俺は木に叩きつけられる。直ぐに追撃が襲いかかってくる為身体を右に逸らすことで避け足を引っ掛けて転ばせる。

倒ればまるでめだかボックスの裸エプロン先輩のような気持ち悪い挙動で起き上がり腕を振るうと腕に岩が集まり籠手のようなものが出て来る。

「よいーよいー！血湧き肉躍る戦いを求めていたのだ！さあ！死合おうぞ！」

「んな、めんどくさい事やるわけがはらへんやろ、死ぬのはお前一人で十分やドアホ」

腕だけでなく脚まで使い始め捌き切るのに幾つか失敗し始め身体に疲労が溜まっていく。やはり、呼吸だけで戦うのは身体のスタイルに合わず苦戦を強いられるも、耐えることに主軸を置いた戦い方故に苦戦で済んでいるだけで実際は遥かに辛い。しかし……それもこれまでだ……

「やつと。お披露目出来るわ」

「ほう？なんだ？新しい妖術か？」

「まあ、んなもんやろ」

「ほな……いくで……」
「……このセリフが言えることにテンションが爆上がりしていく。」

「……………倒れろ『逆撫』」

瞬間世界の全てが逆転した

逆撫

「……………倒れる『逆撫』」

十二鬼月はその覇気に、血気術を全力で解放し構えを取る。血気術自体の能力は極めてシンプル。硬くなる。ただこれだけの能力故にその強さを発揮する。だからこそ彼は自分の信頼する血気術に身を任せて受けの体制を取ってしまった。

斬魄はその解号と共に変化した斬魄刀をゆつくりと風に乗せて逆撫を振り回す。ゆつくりと、この香りを周辺一帯に……………逆撫の甘い香りが世界に広がり、そして……………

瞬間、世界は反転する。

「なんだ……………これは……………」

今まで居た山は空にあり、上を見上げればあつた月夜は下にある。自分と向かい合う鬼殺隊士は山がある空に足を着け逆様に立つ。理解出来ない……………いや、理解したくないのだろうか……………自分自身の何か壊れていく音がした……………

流石に相手も初めての経験のようだ、それはそうだろう。誰しも天に逆さまに立ったことなどないのだから。本来ならば絶対にありえない経験、天に立ち獲物を構える。情報が追いついていないようだ。ならばさらに、混乱させる。

「ようこそ、逆さまの世界へ」

相手は今まで自分の腕を見ていたにも関わらず直ぐに顔を上げた。その顔には驚きと少しの未知への恐怖が見て取れる。

『逆撫』俺の斬魄刀や」

「斬魄刀……………？なんだそれは」

「見えとるものの上左右前後を逆様にする」

「な、なんなんだそれは……………!!」

「慣れて戦うんは無理やで」

「何なのだその刀はああああ!!!」

「やから……斬魄刀や言うとするぞアホ」

問答が終わり斬魄は直ぐに相手に向かつて駆け出す。殺気を出してしまつては相手は武人、バレる。気配に殺気を消し素早く相手に近づきあえてゆつくりと刀を振るう。

わからない、俺は誰を相手にしているのだろうか……鬼殺隊士が素早く近付き刀を振るう。

しかしだ、すぐに見切れる速度右肩を狙われているのがわかれば斬られる部分を硬くし守ればいい。血気術を使い右肩を護り左肩でカウンターの準備をして構える。

そして、右肩に刀は吸い込まれていき……

……左肩が斬り落とされた

何故だ、今何が起こつた……俺は今、何を相手にしている……? 恐怖が全身を駆け巡り身体が動きづらくなつていくのをその身に感じていく。鬼と戦っているのだろうか……いや、それはありえない……ならば俺は何と戦っている……?」

「ついでに」

その言葉が俺の脳内を支配する、この恐怖に脳が悲鳴をあげる。

「見えとる方向と斬られる方向も」

やめろ、それ以上言わないでくれ……

「逆や」

圧倒的恐怖。理解の出来ない力を目の前でゆつくりと解説される。その行いに懐かしいものとそして、耐え難き恐怖と羨望が身体中に刻まれる。その代償は片腕と大きかった。

身体が砂の地面に打ち付けられる。何度立ち向かつてとも一撃で叩き潰され、全ての攻撃が無意味。最初の頃は何をされているのかわからなかった。この男と会つたのは俺が10を超えた頃、鍛え抜かれた肉体に洗礼された技……一撃必殺を心掛けたその武術に目を奪われ

たのを覚えている。速く正確に振り抜かれた拳が強かに相手の胴を穿ち、敵は地に伏せるのだ、何度この光景を見ても仕組みがわからなかった。1年が立つ頃俺はその男を師と仰ぐようになった。

目指すは天を穿つ一撃。その一言に理解は遠のき、遙か高き壁に絶望したのを覚えている。闘気を練れ、技を受けて学べ、奥底に眠る闘志を身に宿せ……言われれば言われる程訳が分からなかった。20年が過ぎた頃俺は……私は師を打ち負かしていた。

しかし、師の技ではなく小手先の技で……師が望んだものの意味がわからなくなつただひたすらに師が老いた故の勝利であった。

私は恐怖した……

……師を打ち負かす次元に至つたにも関わらず戦いはギリギリ、師の一撃に似た一撃を放つものそれは本来の技とは大きくかけ離れた正しく武の頂の一撃。

結局は己の頑丈さに身を救われただけだった。

地に伏した時、師は私に才能がないとおっしゃった。私は年甲斐もなく無力に国を放浪することにした。

武の頂とは一体何なのか……そう悩む時に猗窩座殿と出会った。

いい拳だと言ってくれた……いや、私はそんな言葉を求めていたわけじゃないんだ……

私はただ……

「ただひたすらに天に至る一撃を……!!」

この世界に対応したのか十二鬼月は本当の俺を捉え拳を構える。

今までとは確かに違う大いなる一撃。危険だと脳が言っている。しかしだ、俺も馬鹿なのだろうか……俺の拳と奴の拳……試したくなつた。

「瞬間!!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

身体から怒槌が迸る。夜一さんと同じく雷の瞬間。

そして……

「雷皇戦形!!」

周りにある太鼓の数は3つ、圧倒的に劣化してはいるもののその強さは弱体化して尚切札と呼ぶレベル。神を名乗るは烏滸がましい。故に皇。その強さに嘘は無い。

大きく違うとすればこの雷皇戦形は圧倒的な物理型。周辺に放出する雷をその身に落とす少しの間の肉体の強化を行う。その強化率は未知数であり、その速さと威力はある意味今までの斬魄には無かったものだ。

その一撃が十二鬼月の拳とぶつかり

斬魄と十二鬼月は……………爆発に包まれた。

二枚屋 Oh—E t h u !

あの、山の戦いから1年ほど経った。

そして、今俺は何をやっているのかと言うと……

「H e y !! アイアムナンバーワンザンパクトークリエイラー!!」

「十、九、八、七、六、五枚!!!」

ラップ口調のハイテンション野郎にウザ絡みされているが……我慢せねば……我慢せねば……!!!

「終いに 三枚」

そして、背中から刀を抜き

「二枚屋 Oh—E t h u !」

刀を自慢するように持ち言葉を重ねる。

「一番イケてる 零番隊士」

ゆっくりとラップ口調は変えず雰囲気はさながら刀のように鋭い雰囲気醸し出す。

「ちゃんボクの刀は一振一殺 S a」

そして俺を試すようにこちらを見据え

「その刀を持つ覚悟と強さはあるのか Y o」

俺のスタイルは長い年月で確立された、『刀を活かす』スタイル。常に斬魄刀の能力をメインに置き、体術、呼吸、鬼道をサポートに回す。さらに刀術に身体が引つ張られると言う普通なら有り得ないスタイルは変幻自在の剣技を生み出していた。

しかしだ……相手は『刀神』、同じような刀を活かす剣技が襲いかかって来る、いくら呼吸や瞬歩、鬼道に白打で対応しようとも限界がある。純粹に強く早く、何より重い……

ならば瞬間を……と思い霊圧を高めると

「Y E S !! 護廷チャン！合格だ Y o」

と、一瞬で殺気が霧散して一番最初のおちゃらけた雰囲気に戻る

「護廷チャン、さっきのウエルカムシヨウは心から楽しんでくれたか

N a ?」

流星に色々雰囲気とか崩されて大人しく刀をしまいとてつもなく

腹立たしいが仕方なく……！本当に仕方がなく……話を聞く

「改めて、ちゃんボクが！二枚屋王悦」

俺の刀をゆっくりと見てニコリと笑いながら

「ちゃんボクが、その護廷チャンの日輪浅打（ひのわあさうち）……作ってやる Y o」

よつつつつつつつしやあああああああ

ウリイイイイイイイイイイイイイイイイ!!ビバ!俺の!俺だけの
斬魄刀!!!ひやつはあああああ!!!

「Oh……ちゃんボクでもびっくりするほど喜んでる Y o!こりやあパーフェクトな刀作らんと Na!」

ってことがあってね、今二枚屋王悦が俺の身体で刀作ってる。

「んんんん!!!パーフェクトだ Y o!!!さあ!護廷チャン!持ってみ R o!」

どれどれ?お、おお!おおお!!!

浅打なのに俺が持った瞬間色が変わったアアアアアアアア!!!

これが日輪浅打……やべえ、興奮がおさまらねえ……いやあ、輝哉に無理言って鍛冶施設とあのー、あれ……日輪刀の材料とか、他にも色々譲ってもらってラツキー

「護廷チャン、あとはこの刀を君が解号するだけだ Y o……ちゃんボクも、この刀がどんな斬魄刀になるかわからない……だけれど一言えるのは護廷チャンに適した最高の斬魄刀になるってことだけだ Y o!!」

その後クソラップ……二枚屋王悦は元の精神世界に戻り俺は考えを張り巡らせる……

ちなみにだが、俺にも柱と同じ様に屋敷が設けられていて産屋敷邸の近くであり江戸近郊の田舎にある結構大きめの屋敷だ。俺の改造により少々現代風な建物に変わっており、ご近所さんからは大商人の家と思われている。

実を言うとそれもあながち間違いでなく多くの商品中継地点を務めることで仕入れ値と卸値の差分で儲けている。しかも腹の立つ金持ち共にはちよつと良さげに魅せ好奇心やプライドを揺さぶるだけ

で簡単に大金でお金を払ってくれるから簡単に金儲けできて嬉しい。

お金の半分くらいは鬼殺隊の運営に当てられていてアホ程貢献していてそのせいかどんどん俺の権力が上がっていついて、正直怖い。

最近じゃ俺が出る程の鬼が出ておらず鬼殺隊全体のレベルアップの為に何人かの柱や隊士に鍛錬を続けている。

そう、柱稽古である。そう！柱（に）稽古である！！

そんな多くの人数には鍛錬はつけないと輝哉に言い、まだまだ新人である音柱の宇髄天元と既に古参でありながら、なんだかんだで俺と仲がいい岩柱の悲鳴嶼行冥の2人……そして霊圧が高く鬼道を覚えれそうな隊士10名を選び住み込みで鍛錬をさせる。

基本の面倒は俺が見てたまに元柱である俺を拾ってくれた祖父や大魔王鱗滝、悲鳴嶼や宇髄等と乱取り稽古を行い全体的なレベルを上げていく。まあ、所謂俺専属部隊って奴だ。柱達には担当区域が決められており俺なんかは主に江戸近郊を中心とした北関東だ。まあまあ広いこの区域を瞬歩にものを言わせカバーするというなんともまあ、れつきとした荒業だ。正直自分でも広すぎると思う。なので、俺が鍛錬した優秀な鬼道を覚える隊士達に協力してもらおうって算段よ。

ちなみにだが住み込みではないが、殆ど住み込みと変わらない形で炎柱の息子の2人が我が家で鍛錬をしている。そう、煉獄家の2人である。兄である煉獄杏寿郎はうるせえし、鬼道の才能ないし……原作キャラなのにここまでうんざりする事になるとは……それに比べて千寿郎くん。彼はヤバイ……霊圧がアホほど高い。そして、抜群の鬼道センス……呼吸の才能はないけれども死神としてのセンスなら抜群……いや、この子俺の部隊に貰えないだろうか……

……そうしている間に5年もの年月が過ぎた

護廷十三隊

さて、今日は新しい柱のお披露目会らしく柱としての称号は「水柱」だ。先代水柱が引退するのを機に、功績が上がっていた富岡義勇という男を柱にすると輝哉が言っていた。いや、それ富岡さんやないかあい！てか原作の柱がやつと揃ってきたなおい！

ちなみにだが、錆兎きゅんは我が部隊の三番隊隊長に任命しており目まぐるしい活躍を見せている。柱と同レベルの存在にまで上がったが我が部隊に所属しているために柱にはなれない。

この世界における我が部隊の立ち位置だが『懐刀』護廷斬魄が率いる鬼道などの特殊能力の才能がある十三の部隊。『護廷十三隊』と呼ばれている。俺は焦った。なぜなら輝哉がこの名前を提案してきたからだ、流石に焦ったぜ……結構原作キャラが隊長をやっている部隊もあるが勿論柱以外の人選である。と言うか、柱になるレベルの人間はここには来ない。という訳で我が『護廷十三隊』の紹介である。

一番隊隊長の俺、護廷斬魄。基本的には優秀な人材が揃っていて正しく精鋭部隊である。あまり出ることとは多くなく、十二鬼月が現れた際の対応部隊や救援部隊などである。ここには原作キャラはなし。

二番隊隊長はあの後藤さんである。隠だったのだがこれまた素晴らしい霊圧だったのでウチに來ないか？と誘ったところ直ぐに來たいい子である。既に殆ど強引な方法で瞬間も習得しており、化け物クラスである。この部隊は主に情報関係と索敵などである。戦闘は最低限とは言え全員最低限戦えるレベルである。

三番隊隊長は錆兎きゅん、今では立派な柱レベルになっており、この前平然と大魔王鱗滝と打ち合いをしていた。鬼道も60番台までの詠唱破棄を可能としておりなんでも出来るスーパーな奴になっている。基本的にこの部隊は見回り部隊として日々走り回っている。お疲れ様。

四番隊隊長はアオイちゃん。戦うのが怖いらしく才能があつたので回道を教えてみたらあらびつくり、才能が溢れかえってやがる……戦いが苦手だと言うのでひたすら逃走術を叩き込み、今では立派な隊

長だ。この部隊は基本は今はまだ無い蝶屋敷と同じ役目だ。彼女達もとても忙しいらしい。

五番隊隊長は真菰。接点は？と思うかもしれないが俺だって流石に二、三ヶ月に一回は鱗滝マウンテンに戻って居たので勿論会う機会があつたし、その過程で鬼道も教えた。水の呼吸が錆鬼きゅんより劣っている変わりに80番台までの鬼道なら詠唱破棄を可能としている。この子も化物になった……この部隊は三番隊と同じく見回り部隊で、いつも頑張っていてくれる。

六番隊隊長は天野くん。原作には出てこない子で、呼吸は風。元々旧貴族家の人間らしくとつても他人にも厳しい良い子なんだ。良い意味でバランス型で、不得意が無い。この子含むこの六番隊は護衛から商業まで多彩な子を集めた部隊な為、忙しかったり忙しくなかつたりする、中々に愉快的な部隊だ。

七番隊隊長は大賀さん。とおつても義理堅い子で、鬼殺した時に恩返ししたいと言っていたので取り敢えず祖父の所にこの子を預け雷の呼吸を覚えさせ、その後ここに来てから鬼道を覚えさせている。覚えるのが早く人を指揮するのが上手いのでそういう子を中心にこの部隊に集め、纏め役や冷静な判断役として各部隊に派遣する立ち位置を会得している。

八番隊隊長は四季野さん。この子とはとってもダラしないと言うか、仕事をしない。なのによく江戸に降りては賭け事で大儲けして帰ってくるし、様々な部隊の需要と供給にあつたものをしれつと用意してくるなんともまあ、やはりこの子も大変優秀な子だ。お金稼ぎなど様々なものを集めることに特化した部隊になっており、ふぎけて下弦の首と頼んだ時に本当に持ってきた集団である。

九番隊隊長は紅音くん。正義感溢れる子で鬼に一人立ち向かつている所を回収。鬼道のセンスはあまり無いが抜群の呼吸センスがあつて水、炎の呼吸を習得している子だ。この子は文才があつた為娯楽や情報の統括の為に「鬼殺隊新聞」を作成、暇な時や十二鬼月討伐の時は鬼殺隊の士気を上げる時などにばらまいている。彼の部下たちも貢献していて中々にブラッくな部隊だ。

十番隊隊長はめぐりさん。元は藤の家の人間で各部隊の身の回りのお世話や食事などを担当する何でも屋な部隊だ。めぐりさん本人も優秀で家事などがずば抜けている上に一応岩の呼吸を身につけている。一応で身につけられるほどあの呼吸は簡単では無いと思うのだが……まあ、それは置いておこう。ウチの全部隊はこの部隊には頭が上がらない程様々なことをしてくるので頼もしい限りだ。

十一番隊隊長は亜国くん。風と炎の呼吸を習得しており圧倒的戦闘狂。勿論戦うこと大好きの馬鹿共は全員ここに突っ込んでおり鬼狩り専門の部隊となっている。特に亜国くんは類まれなる頭の良さにも関わらず鬼を前にすると冷静がマイナスに振り切れる為、鬼の前では彼は危険人物筆頭である。鬼さえ居なければすっごい良い子なんだけどなあ

十二番隊隊長は出雲さん。商家出身の天才娘で、頭が良く口も周り腕も立つ、欠点はヤバイ薬を大量に生産する事だけなのだが……その欠点がヤバイ。マッドサイエンティスト気質な点だけはどうかして欲しいところであるが……絶対に治らないであろう。頭のいい研究職系は全員ここにぶち込んでいる。毎日愉快的な笑い声が響くのでとても怖い部隊だ。

十三番隊隊長は煉獄千寿郎くん。この部隊は別名鬼道衆と呼ばれる原作と同じ鬼道特化集団。千寿郎くんは黒棺までなら詠唱破棄出来るほどの天才だ。この部隊の主な役割は全部隊への鬼道の講習など霊圧関係のお仕事で、それ以外は天挺空羅を使った情報収集などの拠点となっている。ここにいる子達は基本的には呼吸を使えない子達ばかりなのでみんな鬼道を一生懸命にやっている。いやあ、努力の鬼と言える集団だ。

このように、我が屋敷はいつの間にかしれっと集落になっており、いつもは普通の生活をしつつ、目に見える対鬼拠点として無惨に何度も襲撃されているが俺や、鬼道衆などが周りに配慮せず戦える場所なので全力で被害関係なく戦うのでよっほどの事がなければ死者は出ない。

無惨サイドからは死神の町として恐れられているとのことで俺は

大変嬉しく思うと同時に無惨の頭が無惨な為、上弦が今まで来たことがないのが幸いである。

とここまで話したところで産屋敷邸に着いたのでこれからは富岡義勇の柱就任を祝うとしよう。

富岡義勇という男

まずは俺の身なりについてなんだが……まずはBLEACHの隊長羽織を思い出して欲しい。アレを羽織った鬼殺隊の隊士で、制服は勿論改造済み背中には殺の文字も変わらず少し洋風と言うか……ぶっちゃけ黒のジーンズにニューヨーク礼装のギル○メツシユの上の服の長袖バージョンで背中から垂れ下がってないバージョンである。わっかんねえ奴はg g r k s!!!さらにこの服装は我が部隊の制服になっており、隊長は装飾が金色、それ以外は銀色となっている。隊長達にはさらに上から隊長羽織を着ていて背中には数字の代わりに『滅』の字、そして胸に本物の背中に書いてある数字(旧字)月の菱形が左胸にある。

さて、伝わっただろうか……もし伝わらなかったらもう、めんどくさいからフイーリングで好きな服装にしてくれ。正直俺の文才じゃあイメージ通りの服装を文章で伝えられん。

「輝哉あー、もう始まつとるかあ?」

「いや、まだまだよ斬魄。二番隊隊長の後藤くんが回収してくるらしいからね、あと少しだと思うよ。」

「なるほど、後藤ならあと少しだろうな……それにしても煉獄さん、オタクの千寿郎くんは勿論家に帰っていると思いますがとつても元気ですよ、あの、兄の煩い方は次代の炎柱としてはどうですか?」

慎寿郎さん家族に冷たいからなあ……なんか良い発言でも引き出せれば千寿郎くんにお話出来るのに

「……………少々粗さは目立つ……が、いい剣士にはなるだろう。あと一、二年修練を続ければきつと柱に手が届くであろう」

ほへえー、原作やと煉獄兄弟のことを一切褒めないイメージがあったのに意外と言うんやなあ……

「天元、オマエはお嫁さんとは仲良くしてるか?」

「ああ、勿論。ド派手に喧嘩もねえし、ド派手に楽しんでるよ。あと斬魄がくれた漬物だが、ド派手に美味かった。」

「そうかあ、今度は”ド派手な”量の漬物を送ってやろう。」

本当に……音の呼吸ミスって足元で弾けて爆発四散しねえかな……マジで、そしたら多くの人が喜ぶぜ。特にモテない男子が。

「行冥は最近はどうな感じや？しつかと息抜きしとるか？おお？」

「いや、私にはまだまだ鍛錬が足りない……最近では精神修行を中心として行っているが……まだまだ、心が弱いと痛感するばかりだ」

「オマエは十分強い……それが自覚出来る日がきつと来る、やけんもつと胸張りのいい、お前の背中を見とる隊士も多いんやからな」

「……そうか、ありがとう、斬魄。少し、自信が持てた……私もまた頑張らねばな」

「さて、そろそろ良いかな？斬魄」

「すまん、輝哉。ちつと話し込んでしまったけ」

「なに、隊士同士の交流は必須だからね、全然大丈夫さ」

そして、柱である全員は忠誠を捧げるように膝を着き、俺もまた懐刀として、柱達に向き直る。そして鬼殺隊の柱合会議が始まった。

「さて、先日先代水柱である水嶋洋介が下弦の肆に殺された。あの日から数日しか経っていないが既に柱となるべき男が居ることから私と、『懐刀』である斬魄が推薦した男、『富岡義勇』を新たな水柱として加えたいと思うのだけれども……どうかな？」

「私達もまた、斬魄殿が認める程の男を否定する必要性もまた無しにございます。」

行冥が代表として答え俺をチラリと伺う。

「ありがとう行冥、では、富岡義勇……入ってきてくれ」

すると、俺らの後ろの外に繋がる扉から中に後藤さんと共に入ってきた。流石後藤さん、息切れひとつせず直ぐに端に避け膝を着く。

さて、俺もひと仕事しないとね……

「後藤二番隊隊長、よくやった。そのまま端に待機しといてくれや。そして、富岡義勇。オマエの話は錆兎からよく聴くで……しかしや、オマエのことを知らない人の方が多い。まずは自己紹介を頼むで」

さてさて、本当に喋らないのか……見ものやな

「……………富岡義勇だ……………」

……

……

……え？

いや、待て待て待て待て！

「待て、それだけか？」

すると、返事をせず頷く

「はああ……好きな食べ物、使う呼吸、歳ぐらいは言えやど阿呆」

「……鮭大根、水、18だ……」

「おい、後藤」

「ハッ……」

「錆兎連れてこい、通訳が必要だ」

「錆兎は今、柱達の穴を埋めるべく、遠征中であります。故に今すぐは無理かと……」

「……はあ、ここまで酷いか富岡義勇。もつと喋れ、会話をしろ。喋らなければ伝わらないことの方が沢山あるんだ。わかったなら会話をしろ、ど阿呆」

「……わかった。」

柱達の間には沈黙が走る。チラツと輝哉を見ていると流石の輝哉も苦笑い、もしかしてコイツどうにもならないのか……？

何かボソボソ喋っていないか天元の方を見るも、何も反応していない辺り、何も喋っていないのだろう。

いや、本当に……

リアルで会うところまで面倒な奴なのか富岡義勇って男は……

「オマエ、んなまんまやと嫌われるぞ」

「俺は嫌われてない」

「いや、それはスルツと出てくるんかい……」

はあ……………マジで通訳が欲しい……………

上弦の影

柱合会議を終え、輝哉と少しの間話をする事になった。しかも、何人かの柱も含めてである。参加するのは炎柱、音柱、岩柱、水柱……所謂必ずどの世代にも入る柱と長くから居る2人の柱である。そして、たまたまだとは思うが原作に全員出てくるキャラ達である。

中々に見ものであるが、今はそれどころでは無い。

「最近、鬼の動きが活性化していてね……斬魄……恐らくだが近々君の部隊である護廷十三隊の所に上弦が出てくる可能性がある。」

輝哉がしっかりと言う時は何か決め手になることがある時である。ということは何かを掴んだということ……

「根拠としては何かあるんか……？」

「大分前に斬魄が調べてくれたあの怪しい宗教を覚えているかい？」

「二番隊の隊士が死ぬ直前で天挺空羅で上弦が居ることを伝えてくれた所やな？」

「ああ………近々、その教主が江戸を訪れるらしい。」

「……ってえと、上弦がコチラに来るってことやな……」

「そういうことなだけども、今日波柱が引退をしたいと申し出てきていてね……来月には新しい柱と交代しようと思っ居たんだ。だから新しい柱候補の子も近くに呼んであるし、斬魄の所に泊めたい貰おうと思っ居てね……」

マジか……つとなると胡蝶カナエさんか？富岡義勇の直後に入つたらしいし、今でも活躍は耳にするからな……

「さらに……だ……鬼の出現情報がだんだんのだがコチラに向かっているような素振りを見せている。」

だからこそ……長い間鬼と戦い続けていて生存率が抜群に高い行冥と天元、そして言い方は悪いが替えのきく炎柱と水柱……か

「てことは、コイツら全員ウチで鍛えればええんやな？」

「そういうことだよ……斬魄が居ると話が早く済んで嬉しい限りだよ」

「俺としては輝哉のおかげで全部トントン拍子に進んでいるんだけど

な……まあ、お互い様つちゆうことや」

俺は言葉を聞き終わるとすぐさま立ち上がり全員を俺の町へと向かわせる。さて、そろそろ……リハビリがてら俺も全力で戦いたいね……

産屋敷邸を後にして、みんなに追いつくころには誰を相手に全力で戦うか……楽しみで楽しみで仕方がなかった。

第一候補、阿散井恋次

蛇尾丸は強い……純粋なあの強さに剣術、近寄せることの無い圧倒的な攻撃範囲。早く重く……そして強い

相手としては申し分なくさすがは副隊長と言ったところだ。近寄らせない戦い方と近寄られても距離を直ぐに取られる剣術……恐ろしく強い

第二候補、吉良イヅル

侘助……斬られれば斬られるほどに重さを増していき、最後は自然に頭を垂れる……恐ろしく怖いスタンドだ……特に相手へ殆ど無意識に頭を下げさせ、その首を刈り取る……強い弱いではなく上手い……そう思わせる剣術を扱うのが吉良イヅルなんだ。だからこそ戦ってみたいと思う強さ……それが彼にはあるのだ。

第三候補、隊長陣

いや、普通に死ぬ。例えば……だ、例えば、山本元柳斎重國総隊長。まあ抗うことが無謀なレベルである。斬魄刀が抜かれたら最後……身体から首がグツバイ！（髭男風）してまうやないか。そんな嫌やぞ。戦いにならないから鍛錬にもならん。

次にヤバいのが卯ノ花烈及び卯ノ花八千流隊長。あの人のことを当初単純な四番隊隊長だと思っていた自分をぶん殴りたい。あの人は何なんだ……!!と総隊長に聞いてみたところ初代剣八らしく、また、全ての剣術流派を納めた人らしい。勝てる訳ねえだろ!!マジで！まだ、鍛錬で最低限打ち合えるレベルまで本人に持ってかれたからまだしも戦いたくねえ！

3番目が言わずもがな涅マユリである。あの、マッドサイエンティストはウチのバカである出雲を超えるどころか超越している。あれ

は途中から実験生物にされるから、やりたくない。死にたくない。てか実験動物になるのは誰でも嫌だわアホ！死ね！

4番目は更木剣八。アイツ、俺、嫌い。アイツ、何時やってもギリギリの勝負しか出来ないから嫌だ、疲れる。なんなんあれ、怖いし殺氣ぶつけてくるし、戦いたかねえよ！誰が好き好んでアイツと戦うか！！いや、十一番隊はアソコ、馬鹿の集まりだから。バトルジャンキーの巣窟は例外だから……ね？

5番目は日番谷冬獅郎隊長だ。あの人は手加減が下手くそなのである。加減をミスって何度俺が全身氷漬けにされたか……そして、自分が悪いのわかってるのにも関わらず、俺を怒る。今のは避けるだとか、まあ母さんにアレは自分でも無理だって言われると納得するんだがそろそろ加減を覚えてもらいたい。

他の隊長は優しかったらまともに鍛錬してくれなかったりちやんと鍛錬になったりといい人ばかりである。

「誰に頼もうかしらなあ……」

座禅を組み、刀を前に刀禅を始める。

まあ、単純に朽木家の皆様か碎蜂隊長、ヴァイザードの皆様、サボり魔（自称、2代目総隊長）かなあ……取り敢えず出会った人でいいか、この中の誰かって事で

よオし決めた！そうしよう！それ以外は無視だ無視！

比較的今挙げた皆様は優しく強く、教えるのが上手い。あの、ひより副隊長でもある。暴言が多いがわかりやすいのでいいのだ。

さあて、誰か居ないかなあ……

意識は深く、落ちていった……

剣八

「おおー！やっぱりこっから来んのかお前はあ!! さああ！殺し合いを始めようぜえ!!」

振り下ろされる刀を横つ飛びで避け呼吸を切り替える

「雷の呼吸 壱の型 霹靂一閃 神速」

雷の落ちる音が響くのと同時に刀同士がぶつかり合う巨大な音が世界に響く。

「稲魂!!」

神速の6連撃を当たり前かのように全部捌く辺り……流石は更木剣八と言った所か……

「いいねえ！もつと血湧き肉躍る殺し合いをしようじゃねえかあ!!」

剣八が踏み込むと何時の間にか刃が振るわれておりそれを全力で捌き呼吸を切り替える

「水の呼吸 陸の型 ねじれ渦・流流!!」

剣八の剣を捌きながらそれを巻き込み一撃を加えるも、笑いながらそれを強引に戻した剣で力任せに受け止め距離をとる。

「ハハハハア!! いいじゃねえかあ!! もつとだあ!! もつと楽しませろお!!」

「クソがアアアアア!!」

もう一度呼吸を切り替え、刀さえも切り替える。

「吹っ飛ばせ！『断風』!!!」

柔らかく、そして鋭く速い雨の呼吸を使い近づき、断風の能力を使う。

「雨の呼吸 肆の型・断風改 五月雨風!!」

柔らかく防御を取りづらい遠くまで伸びる5連撃を放ち、さらに近づき断風の攻撃のリーチを活かした逃れられない攻撃を繰り出すもそれを剣圧で相殺し威力重視の振り下ろしで俺を狙う……がそれを咄嗟に避け大きく距離を取る。

大技での大ぶりを連続で繰り出してくるもそれを避け、飛び、逸らし、受け止め全力で護っていく。荒々しい剣技の中に確かな技術があ

る。正直しんどい……いや、しんどいで済ませていいのか？

唐突に絡まれ、いきなり殺気をぶつけられ、攻撃を仕掛けられそれを防げばやる気か？といや、おいおいおい

許せねえなあ、おい。

思いつきり殺気をぶつけ、剣気を迸らせる。このやり方は卯ノ花隊長に教えて貰った。殺意に殺意で返し、構えを我流に変える。雨の呼吸なんざ捨ておき、全力で倒す。

「くは、くはは、楽しいじゃねえかあ！おい!!」

「そうか、俺は最悪の気分だぜ……!!」

「いいぜえ、いいなあ！どちらかが死ぬまで最っ高の殺し合いをしようじゃねえかあ!!」

「野郎！ぶっ殺してやる!!!」

全力の抜刀。続け様に全ての雨の呼吸の技を展開する。

「雨の呼吸!!奥義!!天叢雲!!」

「野晒い!!!」

「双方、そこまで!!!」

俺の全力の剣技と剣八の斧がぶつかり合い両方とも吹っ飛ばされた所で総隊長に止められる。

生傷が絶えずボロボロだが、剣八に野晒を使わせそれでも相打ちのような形に持ち込めたことに嬉しさを感じながらゆつくりと倒れ込む。

正直もう立てないが、まあ何かあっても周りが助けてくれるだろう。

しかし……しかしだ……

「おいおいおい、痛てえじゃねえかあ!」

うつそだろおい、立ちあがんのかよ。天叢雲は雨の呼吸バージョンの九頭龍閃。そう簡単に耐えれていい技じゃねえんだけどなあ……!

立ち上がって迎え撃とうとするも、俺はゆつくりと背中から倒れさせ、俺の代わりに前に行ったのは父さんだった。

「剣八さん、すんません。ウチの子は限界みたいで……代わりにボク

が相手しますんで……いいですか？」

「くは、くはは、構わねえ！殺し合いさえ出来れば構わねえぜ！」
「んじゃあ、いきます」

神速の刀を危うげなく野晒でガードするも思いつきり吹き飛ばされる剣八。そもそもなぜ、あの刀のあの突きであれ程吹き飛ばせるのか甚だ疑問であるがそれを口に出しては行けない。

単純な瞬歩に破道に縛道でしっかりと対応できるあたり流石は元三番隊隊長。その技は上手いと言う他無いのだ。

縛道を曲光で隠し、それをトラップのように各足場に配置していく。それを直感で避ける剣八も剣八だが、確実に誘導されていく。昔自分で『僕は蛇や』って言っていたように、確実に獲物を仕留めるその戦い方と表情はまさに蛇。

しかし、その程度でやられてしまっただけは剣八の名が廃る。剣八とは当代最強の剣士を指す言葉。護廷十三隊に所属する死神の中でも最強の男がこの地位に座れる。だからこそ……そう簡単には倒せもしなければ諦めることは無い。いやらしく、狡賢い戦い方をそれはそれと真正面から力技で破っていく剣八は、やはり剣八の名に相応しい。

だが、子供の前でカツコつきたいお父さんは無敵なのだ。

もう一度言おう。子供の前でカツコつきたいお父さんは無敵なのだ。

「そこですわ、『黒棺』」

「はっ」

え？さすがに剣八も驚いてんぞ……！いやいやいやいやいやいやいや、待って待って待って待って!!おい、なんでシレッと黒棺を詠唱破棄して使ってんねん！

『六杖光牢』『鎖状砂漠』

すぐに縛道で押さえつけ、後続詠唱で威力を上げていく。

いや、この人……バケモンかよ……

こうして、剣八は敗れ、多くのこの戦いを目撃した死神達は市丸ギ

ン隊長やっべえつと言った印象を持ったという。
「ほな、ボクの勝ちって言うことで、お先失礼します」
そう言っつて父さんはどこかに消えていった。

柱会議（ミニ）

「んで、お前がアレか……新しい柱候補っちゅうわけやな」

「ええ、胡蝶カナエと言います。蝶屋敷は御存知ですか？」

「知らん訳ないやろ、あそここの2つの医療体制で鬼殺隊は回つとるんや、その主である珍しく鬼を救いたいっちゅう隊士。胡蝶カナエ……呼吸は花、ここと蝶屋敷の違いは怪我のレベル。ここでは主に回道を使った回復やさかい緊急時の大怪我とかの少人数の集中治療はウチ、そっちは大人数の治療や。やけん、基本怪我したら蝶屋敷。それが鬼殺隊の常識やで。」

「ふふっ、よく知ってくださるのね。鬼殺隊最強の男、『懐刀』護廷斬魄さん」

胡蝶カナエは優しげな笑みを浮かべお茶を啜る。彼女はとってもいい最近江戸で流行りの高級お茶菓子を持ってきた為俺としても高級のお茶でお返ししなければと今で言う静岡の高級茶葉を使ったお茶を提供している。素晴らしい和菓子だ。特に和菓子だけでなくこの時代珍しい南蛮人が持ってきた洋菓子であるカステラがある事が素晴らしい!!!いや！良い子！この子良い子!!!ああ……ほんと幸せだ……

……………コイツらが居なければな

「ははは!!美味しいがやっぱり派手さが足りねえなあ!!」

「天元……お茶とはそういう物では無いぞ？これはゆったりとした空気を楽しむ物だ」

「……………もう結構だ」

「おい義勇、高級過ぎて味がわからないから食べない方がいいのでは？という考えは言わねば伝わらんし貰ったものは例え味がわからなくとも楽しいめ。美味しいのだろう？」

「……………わかった」

上から天元に行冥、義勇に錆兎だ。

「そう言えば……錆兎、任務はどうした？」

ついさつきまで任務に行っていたはずなのに何故戻ってきているんだ？と疑問に思い口に出すと錆兎は義勇の頬を引っ張りながら答える。

「ハツ……十三番隊大鬼道長の千寿郎から天挺空羅が届きまして、新しい水柱である富岡義勇が来たことを伝えられ、僭越ながら通訳が必要だと考えました。三番隊の見廻り作業は今度総当り稽古をすることを引き換えに十一番隊に交代してもらいました。」

じゅ、十一番隊にかあ……

「お前、よりにもよって十一番隊かよ……他の奴ら居なかったか？」

「いえ、十二番隊が居たんですけど……」

「論外だな」

「ええ、論外でしょう」

「他だと今なら……大賀は？」

「七番隊は今、北に遠征中です。」

そーいやあ、七番隊には行冥の穴埋めをしてもらっているんやっとな

「四季野は？」

「行方不明です」

「二番隊を使え」

「既に走らせています」

錆兎と顔を見合わせ2人して溜息を付く、四季野はすぐに行方不明と言うか仕事から逃げ出す。と言うか何となく場所は推測できる。あのギャンブル好きの事だ……江戸の賭博場に居る。

「ふふっ忙しそうね」

「当たり前だ……優秀な人材達ではあるんだがな、どうしても全員癖が……癖がつ!!!癖が強い!!!」

「ははは!!ド派手でいいじゃねえか!」

「んじゃあ、てめえが司令塔やってみるか？」

「ははは!!ド派手に断るぜ!」

「はあ……」

大きな溜息を吐いてしまったが構わないだろう。ここに居るのは新人の柱候補と騒音野郎に剣士(笑)、コミュ障に付き合いの長い部下だ。許されるだろう。てか許せ。こっちだつてストレス溜まってんだ。

「ふむ、しかして……斬魄殿。我らに話があつたのでは？」

「ああ……忘れてたわ。あ、胡蝶さんお茶菓子ありがとな」

「いえ、それでお話つて何かしら？」

情報はしつかりと集まっている。確信があり、確実に迫っている事はわかつている。毎度毎度の事ながら覚悟を決めなければいけない戦いになりそうだ……

「すう……………」

俺がゆっくりと息を吸つた事で全員が真面目な雰囲気が変わる。

「本日より、既に話が伝わっていると思うが君達にここで生活してもらうこととなった。事情及び説明は俺が担当する。」

「質問いいか？」

「なんだ、天元」

「その柱候補と違って俺ら柱には決められた守護区域が存在する。そこはどうなんだ…………？」

天元は関西、行冥は東北の北、義勇は東北の南だ。

「そこは安心してくれ、我が護廷十三隊によって見廻りを行う。」

「んなら、派手に安心できるな」

「話を戻そう、今回集まって頂いたのは他でも無い。上弦の討伐のためだ。意味はわかるな？」

全員の顔が引き締まり、行冥に至っては念仏を唱え心を落ち着かせている。一種のルーティーンがあるというのは強いものだ……。

「極楽うんたら教つて言う胡散臭い宗教に聞き覚えは？」

天元を除き全員が首を横に振る。

「あの、宗教は耳にしているが……どの噂も派手に胡散くせえがそれが関係あんのか？」

極楽うんたら？ いやうんたら極楽教だったか？ どっちにしても天元が言うように……派手に胡散臭い。

「あそここの教祖なんだが……上弦だ。ウチの二番隊の一人……片桐そよかが教祖が上弦であることを死ぬ間際に天挺空羅で俺らに伝えた。それ以降……連絡は一切ない。」

「死んだ……か……」

「南無阿弥陀仏」

「……………」

「……………ギリツ」

錆兎や俺にとってはとてつもなく大きな失態。仲間が死んでしまったのだ。我が……………我等が護廷十三隊全員が許せるわけが無い。

「その上弦がこちらに向かっているとの情報が入った。教祖やけん動きは掴みやすい……………が、敵は上弦。我が部隊だけで対応は不可能と考えた……………いや、言い方を間違えたな……………」

俺はゆっくりと顔を上げ一人一人の顔を見る。きつと周りから見たら俺の今の顔はきつと笑っているだろう。仲間の仇をこの手で討てるのだ。

「……………俺らだけじゃあ弄び過ぎて逃がしちまう可能性があるからお前らは奴が来た時逃げないように逃げ道を塞いでくれ。」

やつは俺が直々にぶつ殺す。確実に……………この手で……………な」

V S 童磨 1

「ふふん、ここが無惨様の言っていた街かあ。うん！案外普通だな！何も怪しいところなんてない、普通の街だ！やあ、その少年。僕は童磨って言うんだが、こんな夜更けですまないが少し良いかい？」

童磨は知らない……既に自分の存在を知られていたことに

「滲み出す混濁の紋章、不遜なる狂気の器」

童磨は知らない……完全に自分の動向を知られていたことに

「ん？おやおや！こんな辺境の町にようこそ！その素晴らしい出で立ち貴族様かい？こんな所になんもねえよ！なはははは！」

「ほう？本当かい？結構綺麗な街で見所とかはありそうだけどねえ」

「湧き上がり、否定し、痺れ、瞬き、眠りを妨げる」

童磨は知らない……既に包囲されていることに

「いやあ、うん！いい町だ！何かオススメの店はあるかい？」

「んにゃ、こんな街ので良けりやあ俺が教えるがいいのかい？貴族様なんだろう？」

「爬行する鉄の王女、絶えず自壊する泥の人形」

童磨は知らない……既に作戦の中だということ

「いやいや！こんな町に住まう君に聞きたいんだ！そうだ！名前も教えてくれ！私はこれでも教祖でね！君には何か悩みみたいなのはあるかい？」

「ほんまかいな！俺は後藤って言うんだが俺もこころじゃあ有名でねえ、結構自信があるんだが俺はそこまで強くなってね………なに最近よお………」

「結合せよ、反発せよ、地に満ち己の無力を知れ」

童磨は知らない……もう……

「俺が復讐したくてたまらない上弦の鬼が来るんだとよオ!!!」

「破道の九十『黒棺』!!!」

逃げられないのだから……!!

気付いた時には遅く、せめて道連れにしようと後藤と名乗った男の

腕をつかもうとするもその腕を一瞬で弾かれ瞬きをした瞬間には目の前から消えていた。

何故？と考えるより先に黒い壁のような物に囲まれていき出れなくなる。その直後とてつもない重力と痛みを感じすぐに再生力に能力を振る。氷で身体を守り、再生力に力を注ぐ。

長時間の黒棺に耐え、黒棺が解かれ安心してしていると周りから多くの攻撃が飛んでくる。

「破道の五十八『凶嵐』」「破道の五十四『廃炎』」「破道の六十三『雷吼炮』」「破道の七十三『双蓮蒼火墜』」「破道の八十八『飛竜撃震天雷炮』」「破道の八十八『飛竜撃震天雷炮』」「破道の七十八『斬華輪』」
数多の攻撃に瞬時に氷の盾を複数枚配置する事で耐えようとするもすぐに危険と判断し咄嗟の回避で逃げ回る。長く生きた鬼なだけに強く素早く逃げ足が早い。状況判断も優れており最適解な逃走ルートを走り抜ける。

それがわざと作られた逃げ道だと知らず。

「ははは!!これはごふつ……盛大な歓迎だなあ!うん、もう治ったぞ!」

「せっかくやけん……全力で歓迎しなきゃだろう?上弦の鬼、童磨」
童磨は振り返り斬魄を見据える。

「ふは、いいねえ!もう囲まれている感じか!うんうん、逃げる気は無いよ!片桐ちゃんが必ず護廷?うんたら隊が俺を殺すって言ったからね!来たんだ!」

十三人の殺意が急激に高まっていく。

「そうだなあ、名前……!名前を教えてくださいよ!逃げないからいいだろう?名も知らぬ相手と殺し殺されは嫌だからね!んじゃあ!君から!」

と言いながら千寿郎を指さす。

「鬼殺隊が率いる最強の部隊、護廷十三隊……十三番隊大鬼道長……煉獄千寿郎です。」

「護廷十三隊、十二番隊隊長、出雲ミクニというものですよ」

「護廷十三隊、十一番隊隊長、亜国竜二だ、クソ野郎」

「護廷十三隊、十番隊隊長、藤原めぐりです。覚えて貰わなくて結構ですよ」

「護廷十三隊、九番隊隊長、燕州紅音です。」

「護廷十三隊、八番隊隊長、齋藤四季野です。全く、一銭にもならなそうな顔してますね。」

「護廷十三隊、七番隊隊長、槇谷大賀つすよ。まあ逃げる気が無いのは賢明な判断つすよ。」

「護廷十三隊、六番隊隊長、天野響ですわ。まあ直ぐに死ぬので覚えて頂いても意味は無いと思いますわ。」

「護廷十三隊、五番隊隊長、鱗滝真菰です。会いたかったですよ。」

「護廷十三隊、四番隊隊長、神崎アオイです。ええ、私もです。」

「護廷十三隊、三番隊隊長、鱗滝鍔兎だ。死ぬ準備は出来たか？」

「護廷十三隊、二番隊隊長、後藤黎だ。お前が殺した片桐の隊長で、お前を殺す男の名前だ。」

「そして、俺が鬼殺隊『懐刀』護廷十三隊、一番隊総隊長、護廷斬魄だ。まずは一々ちゃんと話を聞いてくれてありがとうな。」

思いつきりの皮肉を込め煽る……まあ意味は無いが

「俺らは護廷十三隊。俺、護廷斬魄の十三ある部隊だ。そして、お前を殺す鬼殺隊最強の部隊つちゆうわけや。恐らく無惨も聞いているんやろう？お前らの足りない脳みそでもここまで多く言われたら覚えたか？護廷十三隊だ。よおく覚えておけよカス。」

「うん！覚えたよ。それにしても13人かあ、すこし面倒臭いね」

「まあ、確実に殺すための配置じゃけん、まあ大人しく死ぬよ」

「うんうん、それは断りたい。みんな強いし面白い！よし！！みんなも鬼になれば良いじゃないか！」

「」「あ、あ？」「」

「あつらあ？地雷踏んじやった？」

「」「盛大になあ！！」「」

ここに、上弦の鬼、童磨と護廷十三隊の戦いが始まった。

V S 童磨 2

「水の呼吸……拾壺の型……水神夜叉」

先手を打ったのは錆兎……鬼道を混ぜることで完成した新たな型。拾壺の型は龍の形で相手に襲いかかる。しかし、それは失敗に終わる。

「うんー良い技だ初めて見る技だけど……相性が悪かったね!」

童磨が扇でひと振りすると水神夜叉は凍りつき砕け散る。そのまま扇を連続で振り氷を飛ばす。

「総員!!敵は氷を使う血鬼術!!吸い込んだが最後!肺を凍らされると思え!!」

「「了解!!」」

全員が回避行動を取りながら炎熱系の鬼道で向かい打つ。

「うんうん、君達は数も多いし才能にも恵まれているね。」

ゆっくりと童磨は二ツ目の扇を取り出しスッと構える。

「僕も少し本気で行こう。『結晶ノ御子』」

童磨と同じ姿をした小さい氷で出来た童磨が合計で4体

「うん、この結晶ノ御子はね強さは変わらないんだ……言っている意味がわかるかい?この子達はみんな僕と同じくらいの技を放てる僕の分身さあ!!どうだい?楽しくなってきたらう?」

……まったく、クソ野郎だぜ

「総員……言いたくは無いが……死を覚悟しい。」

「うんうん、いい心構えだ」

「さあ!どんどんいくよお!」

「総員!散開!!各個撃破に務めやあ!」

「「了解!」」

そして全員がスリーマンセルで四方に散っていき、俺は1人ココに残る。そのスリーマンセルを追うように結晶ノ御子も散開して散り散りになっていく。

「君は……僕が結晶ノ御子を残すとは思わなかったのかい?」

「残ってもお話ししようやっていやあ待ってくれるかなあつてな」

「うんうん、じゃあ！お話ししようじゃないか！僕もいっぱいお話し
たいんだよ！」

全員……無事に帰ってきてや……!!

サイドAチーム

リーダー 鏑兎

メンバー 後藤、アオイ

「ここら辺か……」

「鏑兎先輩……ここは俺に……!」

「……わかった、アオイは後方待機。俺はサポートに回ろう。」

「わかりました!」

後藤はゆつくりと構えを取る。

余談だが……

……後藤の体術は護廷を上回る

「無窮瞬間!!!」

そして、音が爆ぜた。

しかし腐つても十二鬼月の分身体。すぐに大技で返し競り勝とう
とするも相性が壊滅的に悪い。

「俺の瞬間の属性は火」

身体が炎に包まれ、周りの氷を溶かしていく。

「今この状況で……ここに隊長格が3人もいる状況で……万が一にも
貴様が勝てると思うなよ」

突如童磨の前に現れ右ストレート。しかき頭を振ることで避けら
れ扇子を振る。それをすぐに右脚で蹴り飛ばし軸足の左脚さえも浮
かせ童磨の顎を狙う。が、それさえも扇子で止められそのまま跳躍し
ながら下がる。途中で何回か鬼道を放つも血鬼術で相殺され大人し
く下がるしかない。そしてもう一度攻め直し次はスイツチも取り入
れる。流れるような両手脚を使った連撃も高速で振るわれる扇子と
それに合わせて発動する血鬼術により防がれる。しかし……だ、大振
りのかかと落として攻撃を破りコチラが隙を見せた瞬間、真横から鏑
兎とスイツチで入れ替わり瞬時に拳圧で追撃をする。

「錆兎オ！行くぞ!!」

「遅れんなよ！後藤！」

一気に体勢を崩した結晶ノ御子に大技を叩き込む

「無窮瞬間！炎天龍王武人衝撃波！」

「水の呼吸！拾式の型！水神・八岐大蛇!!」

穹から無数の数十連撃を落とす火の龍王と地を這う柔らかく鋭く八つの頭を持つ水の龍王が咄嗟に対応した童磨の大仏ごと全てを喰らい尽くした。

「あー、錆兎お……無事？」

「無理だ、正直限界……」

「2人共!!肺が凍りかけてます！すぐに治療を……!!取り敢えず総隊長には私から天挺空羅で伝えておきますから休んでください！」

Aチーム、被害 錆兎、後藤両名の肺が凍傷及び錆兎は右腕が後藤は左腕の筋肉断裂及び靭帯損傷。両名全治7ヶ月。

サイドBチーム

リーダー 真菰

メンバー めぐり 出雲

「キャハ、キャハハハハ!!いいですねえ！面白い！」

「ちよつと！出雲！」

「氷の血鬼術というシンプル故の強さというやつですかあ、ザアンネエンなことにい？本体じゃなあいのでえ実験は出来ませえんねえ、クヒ、フヒハ……くひひやはあひやひやひや!!」

「出雲……?」

「すいません、めぐり姉さあん」

リーダーは真菰だろう。しかし、出雲はめぐりには頭があがらない。めぐりは余り強くない。色々不安定なバランスに綺麗に立っているのがこのチームである。

「それでえ?マコちゃん、どおするのかしらあ?」

「私達の部隊の強みは安定した鬼道の強さ、後藤さんが居ないから一瞬で交代し、黒棺に閉じ込めることは出来ないけれども縛道で全力捕縛の上で黒棺の3人による重ねかけ……かしらね」

「となると、ウチは縛道ちゆうことかしら？」

「そおなるねえ、私とマコちんの2人がかりで押さえつけるのおでえ、頼みましたよオ？」

同時に左右から駆け抜ける真菰と出雲。

「……水車!!」

「はあい、氷ならこれはキツついじやない？」

真菰が水車で突撃し、それを受け止めようとしたものの隣からかけられた解氷剤を浴び……

「え、ええ……?!」

「はあああああん?!?!」

「あ、あれまあ……?!」

Bチーム 被害ゼロ

サイドCチーム

リーダー 四季野

メンバー 天野 亜国

「天ちゃんにあこつち構えなさい、行くわよ」

「……」

「構えとるわあー!」

四季野が踏み出すと同時に攻撃を叩き込む亜国。しかし真正面から斬りつけていたことから簡単に扇子で防がれる。しかしその隙に風の呼吸で唐突に下から斬りつける天野。

「縛道の六十一 六杖光牢」

逃がしはしない、しつかりと縛道で縛っていく

「逃がしはせえんへんで縛道の六十三 砂条鎖縛」

「なんや、そこまで強うないんやな、これで仕舞いや。縛道の七十九

九曜縛」

「ギャハハハハ!!クソザコナメクジがあ!炎の呼吸 拾壺の型ア!

烈火爆炎!!」

「……まだまだ、風の呼吸 玖の型 嵐天・威風竜鱗……………」

音の呼吸を超える大きく爆発する振り下ろしと剣圧だけで肌が切り裂ける四連で放つ横薙ぎ。結晶ノ御子が大量に放つ冷氣だけで技のキレが大分落ちるがそれでも大分ダメージを与える。しかし技を放った直後全力で天野が後退する。

「どうしたん?天ちゃん」

天野の手を見ると口から零れた血が大量に着いている

「……………いつの間に!?亜国!急いで離れなさい!!」

「ああん!?今が殺すチャンスだろおがよお!!」

「馬鹿!!このお馬鹿!!アンタの身体まで氷が侵食してるって言ってるのよ!!」

「平気だ馬鹿!!」

「ああ……………!!もう!巻き込まれても知らないわよ!破道の九十 黒棺 !!……………よおし!成功!!」

「ガハツ……………てめえ!四季野お!邪魔すんじやねえ!」

「馬鹿!お馬鹿!もう!血反吐出てるじゃない!急いで避難するわよ!こっからは総隊長の戦い、私達は逃げるのよ。」

「……………ケツ」

Cチーム 被害 天野、亜国両名の肺が凍傷及び重症。

サイドDチーム

リーダー 大賀

メンバー 紅音 千寿郎

「んじゃあ、確実に早く、ぶっ殺して行きますっすよ」

「わかりました大賀さん」

「では、僕はいつも通りサポートします」

恐らくこのメンバーが一番安定しているだろう。近接が優れている紅音と大賀……………この2人が時間を稼ぐ間に千寿郎が結晶ノ御子を倒せるレベルの鬼道を浴びせるだけで勝てるのだ。

「では、任せましたよ」

そう言う千寿郎は退き、大賀と紅音は構える

「んじゃあ、行くつすよ」

「炎の呼吸 拾壺の型 炎獄絶走」

炎の呼吸にはない居合いの型。斬魄と大賀が使う雷の呼吸を見て学んだ炎の呼吸最速の型。代々煉獄家に伝わる拾壺の型、煉獄と似通う斬りながら前身する型だが速さが違う。その最速の炎の呼吸が駆け抜けて斬りつけるも結晶ノ御子も大仏を出す。それごと切り倒すもその間に結晶ノ御子は逃げていた。

しかし、それで逃げられる程彼らは甘くは無い。

「雷の呼吸 漆の型 雷神舞闘」

雷の呼吸 壺の型 八連 霹靂一闪 神速をちやんとした技にしたものが結晶ノ御子を切り崩す。何よりも、どの呼吸よりも速い最速の型霹靂一闪の神速、その八連というある意味無謀に近い技。腕を、脚を切り落とす。確実に殺すために。

「大賀さん、千寿郎さんの準備が整いました。」

「わかったつす」

「さあ、終わりの時間です。破道の九十九 五龍転滅」

この地には最終手段として五龍転滅が使えるように霊脈が流れる地を選んでいた。だからこそこれを使いこなせる千寿郎か斬魄……この2人の最終手段になっているのだ。

そして勿論逃げることも無く……いいや、言い方が悪かっただろう。逃げる事など不可能なのだから。

「終わりました……が……さすがに疲れましたね」

「うつす、これからは総隊長のターンつす、これより全班は撤退及び柱が総隊長の元に向かわないよう食い止め、治療及び童磨が逃げないよう見張る事つす。一応総隊長からは俺が指揮を執るよう言われているのですぐに戻るつすよ!」

Dチーム 被害ゼロ

これにて、各隊長達の戦いは終わった。

そしてこれから始まるのは総隊長 護廷斬魄对上弦の式 童磨の

戦い

誰もこの戦いを邪魔することは許されないのだ……

V S 童磨 3

「ふふふーいやあ！ここまで長くお話したのは初めてだよ！うん！やっぱり鬼になりなよ！」

「お前は人の地雷を踏むのが大好きやなあ、死ねば？」

「酷いなあ」

俺と童磨はお互いの攻撃圏の外から会話をしている。続々と倒したとの報告があり、全員が逃げている状況。

フィールドは整った。

さあ……始めようか

「ほな、そろそろ行くで」

「うんうん、先ずは絶望をあげよう！結晶ノ御子」

素晴らしい童磨は五体の結晶ノ御子を作り出す。これで6対1。普通は負けやしないし鬼殺隊からしたら絶望だろう……

……俺がいなければ

「甘いやつちやなあ、そもそも俺が残った意味を理解出来ひんか？」

「君一人が犠牲になって逃げるためじゃないの？」

「馬鹿か、俺は護廷十三隊最強の男や……お前1人、俺だけで十分やつてことや。わかつたらさつさとかかかってきい、ぶつ殺してやるけ」

その直後結晶ノ御子は動き出し大技を繰り出す。目の前に大きな氷が出来上がり波のように襲いかかる。

「ほな……初お披露目や、俺の斬魄刀……ご覧あれ」

ゆっくりと刀を抜き構える

「風に櫛り雨に沐う ……………」

…………… 『天歸爾』

刀が光り、形を変える。普通の刀から大きく形は変えず刀の波紋の黄色の雨の色が強くなる。

「……風天竜巻」

刀を横薙ぎに振るうと強烈な竜巻が生まれ氷を切り飛ばしていく。さらに連続で振るう事でさらに多くの竜巻を発生させ結晶ノ御子を吹き飛ばす。上弦の式といえどきついものがある。すぐに散開して散り散りに逃げて行く……さつきとは真逆の構図だ。

「温泉雨」

約40℃の雨が降り注ぎ童磨の氷を全て溶かしていく。大きな氷像以外の細かい氷の礫は意味をなさず消えていきここでやつと童磨から余裕の表情が消える。

「俺の斬魄刀……天帰爾は雨と風を操る斬魄刀、そこまで強い斬魄刀じゃないよ……始解はね……」

「ふむ……流石は鬼殺隊最強ってことかな？僕も本気を出さないといけなくなっちゃったかな……散り蓮華」

「甘いよ……上昇烈風」

数多の氷の華が強烈な風に吹かれて空に舞い上がり砕け散り空から降り注ぐ温泉雨で溶けきってしまう。

「うんうん、君はあれだね決め手に掛けてるね……近づけば結晶ノ御子達による数の暴力で倒され、技も僕が普通に相殺できる。しかも僕はもう油断も何もしてないぞう！」

「……ほうかあ……バレとったかあ……このまま時間稼ぎして太陽で焼けしねばいいのに思ってたんだがなあ……」

「無駄だよ、もう手加減無しで殺しに行くから……うん、可哀想にねえ……」

「なら、俺も奥の手を1つ……見せようか……」

斬魄も童磨もふざけた雰囲気は消え去り油断をしない。ゆっくと斬魄は刀を……

……放り捨てた

「……?!?!?!」

「本来ならこんな季節に見れやしない雪、喜ぶ気にもなれねえし、ワイ

はそれ以上の氷雪を知ってるけん……面白みも無いなあ」

童磨は命の危機を感じ瞬時に仏像を生み出し全力の一撃を繰り出す。

「そう思わへんか？ 『ティア・ハリベル』」

「あんだ、私がすぐ来て助けなかったら死んでたのわかって言ってる？」

「まあ、些細なことじゃないか……それじゃあ計画通り、早速頼むぜ」
いつの間にか空に立っていた斬魄とティア・ハリベルと呼ばれた金髪的美女、彼女は頼むと言われた直後金色の光となり護廷斬魄を包み込む

服には一切の変化はない。しかし顔には口元を覆う大きな白色の仮面が生まれ、手には大剣を装備している。それをゆつくりと構える。

「準備はいいか、クソ野郎。」

口を開くとハリベルの声と斬魄の声が重なって聞こえる。

「それはなんだい……う」

「どっちなんだろうなあ、『十刃』か『仮面の軍勢』か……まあ『虚化』つて奴だ。」

流石の童磨も更なる進化に苦笑いが止まらない……

「……………ふふ、ふはは！ わかった！ この嫌な感じ！ これが恐怖かあ！ 初めてだよ！ これが感情かあ！ ああ!!! 死にたくないなあ!! 冬ざれ氷柱！」

上から氷柱が降り注ぐがそれを響転で余裕を持って躲しゆつくりと敵に向かって様子見の一撃を放つ。

「虚閃」

手から放たれた虚閃は童磨の元に向かうが直前で氷壁に阻まれる。

「虚弾」

無数の極上の虚閃が弾丸となって童磨を襲いかかるが、童磨も今までと同じように氷の壁を出し防御する。

「どうした？ 全部防御ばかりしてさつきとは立場が逆だな？」

「うぐう……キツついなあ……！ 霧氷・睡蓮菩薩!!」

今までの中途半端な大仏ではなくちゃんとしたサイズの巨大な氷の菩薩が現れ、その口から冷えきった息が吐かれる。

「1つ言い忘れていたな……虚化じゃあ呼吸は必要ないんだ」

「……!?!」

「鮫特攻!!」

「結晶ノ御子!!枯園垂り!」

鮫特攻、スコントロ・デイ・スクアール。剣を高速で振るいながら移動することで、周囲のものを切り刻みながら特攻する技。馬鹿な主人公がハリベルって鮫だよな?じゃあ使うしかねえだろうって安易な考えで師である卯ノ花隊長にふわってした感じで伝えたら見事に再現され、後に主人公からふわっと聞いた剣技を完全再現し、修行に取り入れられるのだがこれはまた別の日に……

簡単に言えば、結晶ノ御子を五体切り伏せながら菩薩をさらに切り捨てそして六体を犠牲にし時間を稼いだ童磨は防御はするもの大きく吹き飛ばされる。

結晶ノ御子五体と童磨本人……しかも両方とも再生可能で菩薩まである。確かな強さがある。正直真正面から戦って勝てるのは何人いるのだろうか……恐らく居ないだろう。

「そろそろ頃合いか……証明したかったのだ」

「霧氷・睡蓮菩薩!!」

「水が氷に勝つ………日番谷冬獅郎だけが例外だと言うことをな………!!」

霧氷・睡蓮菩薩の質量を込めた高速の一撃、重く速く、そして触れれば凍ってしまう正しく必殺の一撃………

相手が斬魄でなければ

「討て『皇鮫后』」

菩薩が……結晶ノ御子が……咄嗟に逃げた童磨本人と離れていたからこそ対応出来た柱や護廷十三隊の面々を覗いたこちら一体の万物万象が水に呑まれた。